

# 川に学ぶ体験活動

## 全国大会

川と地域の  
未来を考える

in  
美濃加茂  
岐阜県

2025 11 | 1 (土) 2 (日)  
かもーる 美濃加茂市文化会館ホール 他

### 活動報告書

**主催** 第24回 川に学ぶ体験活動全国大会実行委員会

**実行委員会構成団体** NPO法人川に学ぶ体験活動協議会・美濃加茂市  
国土交通省木曾川上流河川事務所  
国土交通省新丸山ダム工事事務所・岐阜県河川課  
(一財)公園財団木曾三川公園管理センター  
NPO法人エヌエスネット・NPO法人みどりの風

**後援** 国土交通省・文部科学省・笠松町・公益社団法人河川協会  
公益財団法人河川財団・国立研究開発法人土木研究所  
リバーポートパーク美濃加茂

**協賛** 共和コンクリート工業株式会社  
株式会社建設環境研究所  
株式会社クリアウォーター



木曽川は、御嶽山南麓の鉢盛山を源流とし、伊勢湾まで約229kmを流れる雄大な川です。その流域には、中山道の宿場町や川湊として栄えてきた町々が点在し、長い歴史と文化を今に伝えています。

中山道太田宿のある美濃加茂市では、かつて「日本ライン下り」が行われ、多くの人々が川に親しんできました。現在、その出発地には都市公園「リバーポートパーク」が整備され、川とまちが身近につながる憩いの場として親しまれています。

木曽川を下ると、日本最古級の地層に隕石の化石が見られる坂祝町、国宝・犬山城と城下町のそばを流れる犬山市、木曽三川公園を経て、歴史ある笠松町の川湊へと続きます。本大会では、こうした木曽川流域を舞台に、川に学ぶ体験活動全国大会を計画しました。近年、この地域では、川を活かしたさまざまな取り組みが進められています。美濃加茂市では太田宿とリバーポートパークを中心にしたまちづくり、犬山市では木曽川鵜飼や城下町の整備、各務原市ではアクア・トトぎぶを有するハイウェイオアシスで、木曽川源流域を体験できる人工河川が整備されています。

また、笠松町では川湊を活かした公園整備や、地元小学校によるEボートでの木曽川下り体験など、行政と地域が協力しながら、木曽川を身近に感じられる取り組みが行われています。

本大会は、こうした木曽川流域の魅力と取り組みに触れながら、全国で活動する団体同士のつながりを深め、川と人とのより良い関係を考える場として開催しました。

## 11 1

### 01 エクスカーション

美濃太田宿見学



### 02 オープニング

美濃乃國 御神火太鼓による力強い演奏

平成8年に太鼓好きのメンバーによって美濃加茂市で結成いたしました。

和太鼓を通じ「新しい祭文化の創造を目指して」、現在小学1年生から70代までの総勢25名で活動しています。

### 03 開会式

歓迎挨拶	藤井浩人美濃加茂市長
来賓挨拶	島本和仁国土交通省河川環境課長 辻英之衆議院議員
主催者挨拶	北川健司大会実行委員長

### 04 基調講演

「アウトドアスポーツを活かした地域資源の活用」

株式会社モンベル会長 辰野 勇氏

### 05 パネルディスカッション

「水辺の安全をいかに進めるか」

進行	宮尾博一川に学ぶ体験活動協議会代表理事
パネラー	高畑栄治国土交通省中部地方整備局河川部長 田村祐司東京海洋大学准教授 菅原一成公益財団法人河川財団上席研究員

### 06 川に学ぶ体験活動全国事例紹介

〈北海道帯広川〉 NPO28サポートセンター代表 千葉利光  
 〈鹿児島県川内川〉 かごんま川内川RAC代表 春園四郎  
 〈福井県九頭竜川〉 環境文化研究所代表 田中謙次  
 〈宮崎県五ヶ瀬川〉 五ヶ瀬川流域ネットワーク代表 山田大志

### 07 川に学ぶ体験活動岐阜県事例紹介

木曽川 有限会社EAT&LIVE取締役 水口晶  
 庄川 トヨタ白川郷自然学校 旭祐貴  
 木曽川 笠松町立松枝小学校教諭 小島一敬  
 揖斐川 NPO法人緑の風 浅野純一

### 08 閉会挨拶

大会副実行委員長 RAC代表理事 宮尾博一

### 09 地元演芸披露

チアダンスチームCheer Tink

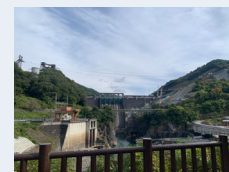
### 10 交流会

リバーポートパーク BBQ 会場(岐阜県美濃加茂市御門町 2-6-6)

## 11 2

### 木曽川周辺をめぐる分科会

- ①新丸山ダム建設工事見学
- ②河川環境楽園(アクアトトぎぶ・土木研究所・自然発見館)見学
- ③リバーポートパーク 木曽川ラフティング SUP
- ④Eボート体験(河川環境楽園から笠松町川湊)





# DAY 1

1日目は、全国から川に関わる多様な立場の参加者が集まり、講演や意見交換、事例共有を通じて学びを深める充実した一日となりました。はじめに行われた基調講演では、アウトドアスポーツを活用した地域資源の活かし方が紹介され、自然環境と地域振興をつなぐ新たな視点が提示されました。川という身近な自然をどのように地域の魅力として発信していくか、参加者にとって多くの気づきが得られる内容となりました。続いて行われたパネルディスカッションでは、「水辺の安全をいかに進めるか」をテーマに、現場での経験や実践に基づいた具体的な意見交換が行われました。教育現場や地域活動に関わる参加者にとっては、日頃の取り組みを見直す契機となるとともに、今後の活動に活かせるヒントが数多く共有されました。また、全国各地からの活動事例報告では、子どもたちへの体験活動、防災教育、地域との協働など、多様な取り組みが紹介されました。それぞれの地域の特色を生かした実践は、参加者同士の刺激となり、新たな連携や発展の可能性を感じさせる内容でした。さらに、地元団体によるパフォーマンスも披露され、会場には和やかな雰囲気が広がりました。こうしたプログラムを通じて、学びと交流の両面がバランスよく組み合わせられた大会の特徴が感じられました。夕方からは交流会が開催され、参加者同士がより近い距離で語り合う時間となりました。日中のプログラムで得た学びを共有しながら親睦を深めることで、分野や地域を越えたつながりが生まれ、今後の活動につながる関係づくりの場となりました。1日目は、知識の共有とともに、人と人のネットワークを広げる重要な機会となりました。

## 歓迎挨拶

美濃加茂市長



藤井浩人(ふじいひろと)氏

本日は、「川に学ぶ体験活動全国大会」がここ美濃加茂市で開催されますことを、心より歓迎申し上げます。

飛騨川・木曾川の合流点に位置するこの地域は、豊かな自然を背景に、旧石器時代から縄文弥生・古墳時代にかけて人々が暮らし、文化を育んできました。江戸時代には中山道の宿場町・太田宿として栄え、木曾川の「太田の渡し」は人と物の往來を支える重要な交通の要衝でした。まさに“川とともに歩んできたまち”が美濃加茂市です。

木曾川は古くから本市の産業、歴史、文化を形づくってきた大切な存在であり、その流れがまちの暮らしの礎となってきました。かつては舟運によって木材や物資が行き交い、地域経済を支える「物流の要」でしたが、時代の移り変わりとともに、川との関わり方も大きく変化してきました。近年では、防災・減災の視点や自然体験、環境教育の場としての役割が高まり、川を「守り」「学び」「楽しむ」存在として、次世代につなげる取り組みが進められています。

現在も、JR美濃太田駅を中心に高山本線・太多線・長良川鉄道が交わり、東海環状自動車道美濃加茂インターチェンジや岐阜清流里山公園など、川が育んできた交通と自然が調和するまちづくりを進めています。

また、飛騨川には小山観音やボートの強豪・加茂高校の艇庫があり、木曾川にはリバーパーク美濃加茂、友進リバーサイドフィールド、木曾川緑地ライン公園などが整備されています。ここではSUPやラフティングなどのアクティビティが盛んに行われ、「ONEPARKRIVERFES」や「Rivert to Summit」といった流域連携イベントを通して、川と人、地域と文化をつなぐ新しい拠点となっています。

さらに、市内の小中学校では「ふるさと木曾川を感じる体験研修」を通じ、自然の中で遊びながら川の魅力と危険性を学ぶ教育を進めています。本大会が、改めて川の豊かさと学びの意義を感じる機会となり、参加者の皆様にとって実り多い大会となりますことを心より祈念申し上げます、挨拶いたします。

## 来賓挨拶

国土交通省 水管理・国土保全局  
河川環境課長



島本和仁(しまもとかずひと)氏

ただいまご紹介いただきました国土交通省の河川環境課長をしております島本と申します。

本日は、会場に来る前に太田宿に立ち寄らせていただきました。私25年前、木曾川上流河川事務所の調査課長をしております、要は技術者としてまだ半人前の頃に、この木曾川にいろんなことを学ばせていただきました。もちろん長良川、揖斐川もそうです。また、私福井出身でございまして、以前のこの大会の開催地も福井だったということで、何か縁を感じるところでございます。

今日もですね、来る間に爆弾低気圧が北海道で起こっていて、960ヘクトパスカルまで下がりそうな予想になってました。11月なのですが、青森と秋田で氾濫注意水位超えたんですね。また、予想では南の方で新たな台風が発生しようとしています。これはフィリピンの方の話で日本には来ないので大丈夫なのですが、11月というのに全くもう気候変動なんでしょうか、気象が常に予断の許さない状況になっていて、川に対して非常に畏怖を覚えるところがあります。

今日お集まりいただいている方々は、川を楽しむ方々だと思います。楽しさあって、やっぱり人生だなと思っておりますので、この川への畏怖と楽しさを両方覚えて初めて川と親しむって形だと思います。今日参加の川で活動されている方々は、非常にそういったところをしっかりとやっておられる方々だと思います。我々行政としましても、「かわまちづくり」の担当も私のところで担当しておりますが、いわゆる河川環境学習、こういったことも、しっかりと進めなければいけないという認識であります。今日は、いろんなご意見伺いながら、前に進んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

## 来賓挨拶



衆議院議員

辻英之(つじひでゆき)氏

衆議院議員の辻と申します。昨年8月までこっちの業界にいました。長野県の山奥で、天竜川の流域ですね、子供たちのキャンプや山水の学校やってたものです。30年間やってました。川に学ぶ体験活動協議会は2000年の設立当初から関わっておりまして、昨年まで理事も務めていました。東京と福井の大会でも実行委員として関わっていました。

ちょっと立場が変わってしまったんですが、私は文部科学委員会と衆議院の文部科学委員会と災害対策委員会に所属しています。国会の中でも、これだけ災害が多くなってくると、例えば川に対する正しい理解とか学びがどうしても必要だと災害対策の方からもこれ捉えています。その最前線にいるのがこの川に学ぶ体験活動だろうと確信をしています。

体験活動の分野から生み出された国会議員として、この分野のことをしっかりと応援していきたいと思ってます。それをどうしても伝えたくて、本当に2分だけいただきましたが、やってまいりました。この後すぐにまた福井に戻ります。九頭竜川の九頭竜湖ってところで会合がありまして、そちらにまた戻らなくてなりませんので、一緒にいることできませんが、盛会をお祈りしております。今日はおめでとうございました。ありがとうございました。

## 主催者挨拶

NPO法人エヌエスネット理事長

北川健司(きたがわけんじ)氏

本日は第24回川に学ぶ体験活動全国大会にお越しくださり、ありがとうございます。私は川に学ぶ体験活動協議会の常任理事で人材育成部長を担っていますが、今回は木曾川でやるということで、実行委員長を拝命しております。私は生まれも育ちも岐阜市柳ヶ瀬で町人子なんですが、長良川で子供の頃から遊んで、川も大好きな人間でありました。本業は山岳ガイドをしてるんですけど、山と川は一体ですよ。

木曾川、岐阜県一の大河です。木曾三川には長良川と揖斐川があります。日本海に流れる川として、岐阜で言う宮川、それから庄川というのがあります。もう一つは愛知県に流れる矢作川。これだけの川がある、山と川の王国が岐阜県です。美濃加茂市は、僕らも高校生の時からよく遊んでますが、「美濃加茂」と言わずに「美濃太田」っていう駅名にもなってますが、中山道の宿場があり、木曾川には川湊があります。木曾川には岐阜県の中では太田宿、笠松の川湊、この2つが大きな川湊の文化が残ってます。

川に学ぶ体験活動の全国大会は24回で、昨年は大町市、その前は福井市と24回重ねてまいりました。大会は各地での川を巡って、そこに文化を知るということも目標でやっています。今回も明日には分科会が4つあります。1つは木曾川のラフティング。それからEポートで河川環境楽園から笠松川湊へ下る。今、工事中の新丸山ダムの工事現場を見に行く。もう1つが、河川環境楽園アクア・トトぎふなどへいくという4つの分科会があります。今更ですけど、行ってみたいという方は帰りに受付で申し出ていただければ参加できるようにはしております。川に学ぶ体験活動協議会では川の安全を高めることで、ライフジャケットの開発やいろんな安全用具の開発と、指導者の育成として全国に1万人以上のRACリーダーを養成してきました。各県にトレーナーを配置して講習会を行うことも人材育成部会で主にやることです。それ以外に全国大会や、RACフォーラムなど、いろんな安全に関する技術に関する活動を普及に努めてます。

今日は僕らのRACの元理事で、前回の衆議院議員福井2区で当選した辻さんが急遽来ていただきました。どうぞ皆さん、この後もモンベルの辰野さんの基調講演もすごく興味深い内容です。RACの全国各地の団体、それから岐阜県の団体が活動してる事例報告もあります。大変興味深い全国の活動事例です。Eポートという、国土交通省がダムでの交流のために作ったボートの30周年ということで、全国のEポートの使用事例も発表していただきますので、ご期待ください。それでは皆さん、2日間楽しんでってください。どうもありがとうございます。

## 基調講演 「夢と冒険」

株式会社モンベル会長

辰野勇 (たつのいさむ) 氏

私の場合もちろん川もやりますか、元々登山が本業でして今日に至るまで私のバックグラウンドからお話をさせていただきます。これ国語の教科書です。高校1年生の時、1冊の本と出会いました。ハインリヒ・ハラーというオーストリアの登山家の書いた「白い蜘蛛」というタイトルの本でした。

ヨーロッパアルプスの3大北壁があります。当時、最も難しいとされていたアイガー北壁の初登攀記です。標高3970mで決して高い山じゃないんですか、この北壁が1800mの標高差あります。東京スカイツリーが3つ入る、垂直の壁です。1936年にベルリンでオリンピックが開催された時に、時の総督ヒトラーが、このアイガー北壁を最初に登ったクライマーには金メダルを出すことを布告。多くのクライマーが取り付くんですが失敗すなわち遭難して亡くなる。2年後の1938年に、この本の著者であるハインリヒ・ハラー、オーストリアのパーティと、アンドレー・ヘックマイヤーというドイツのパーティが一緒になって見事頂上を落とすという、こういう本なんです。

頂上直下に見えている、下から見ると白い蜘蛛が手足を広げたように見える氷壁がある、そこをどうしても登らんといかない。で登ってる最中に雪崩に遭うという、ハラハラドキドキする、そんな本でした。これを読んだ16歳、高校1年生の辰野少年は、こともあろうに夢を持ったわけですね。で、1つ目の夢はこのアイガー北壁を日本人として初めて登りたい。こういう夢を持ちました。で、もう1つの夢は本当に山が好きでしたから、いつか大人になって仕事に就くとすれば、山に関連したビジネスを始めたい。そんな夢を持ちました。

とりあえず一番最初にやったのは、家に帰って貯金箱を作って、とりあえずスイスに行かなきゃ登れないわけですから、いくら技術があっても体力があっても。お金が必要です。

5年後1969年21歳の時に横浜から船に乗り、ナホトカへ3日間かけて、ハバロフスク、ナホトカ、それからモスクワ経由でスイスに入って、アイガー北壁標高3970mですが、この北壁が1800mあります。で、これをこういう風に登っていったわけです。

当時一緒に山登りをしていた仲間。右から2人目の赤いヤッケが僕で、左から2人目の青いヤッケが真崎文明。これは僕と一緒にモンベルを創業したメンバーです。僕ら2人以外の右隅も真ん中も左端も全員山で亡くなりました。すなわち、モンベルという会社は当時一緒に登った山仲間の生き残りの2人で創業したということです。多くの仲間が命を落としていく中で、自分もいつかやっぱり、下手の鉄砲撃ちも数撃ちや当たるっていうけれど一発当たれば、命を落とすという、だ

1947年大阪府堺市生まれ。

1969年には、アイガー北壁日本人 第二登を果たす。黒部川源流部から河口までをカヤックで初下降、ネパール、北米グランドキャニオン、ユーコン、中米コスタリカなど世界中の川に足跡を残す。

アウトドアを通じた地域振興や教育など幅広い活動を主導してきた社会事業家でもある



んだん山から少し気持ちが遠のいて来て山から川に転向していくわけです。

たまたま第3回の瀬田川で開催されたワイルドウォーターの大会でビギナーズラックで優勝してしまったんですね。これでもなんか自分はカヌーの洗礼を受けたみたい。当時まだカヤックなんて言葉も知らなかった時代ですが、川にどんどんハマっていくわけです。

どこ行く時も笛は持ち歩いてますが「四万十の春」という曲。モンベルの店行くと必ず流れてくるんですけど、聞いたことあるかとは思いますが、僕のオリジナルの曲です。「四万十の春」(笛の演奏)

さて、こういう冒険をやってきた中で、自分が自分なりに学んだことがたくさんあります。それは生きる力ということです。大阪の進学校の理事長の平岡達人(たつと)さんという方とよくお話するんですが、彼が言うには、うちの学校で勉強のできる人は必ず共通点がある。どういう共通点か。まず集中力、持続力がある。最後に判断力がある。受験勉強という過酷な環境でこの力が身についた、集中力、持続力、判断力があるといわけです。

山登りばかりして勉強はできなかった。でもこの集中力、持続力、判断力、平岡さん、僕の顔見てニコニコ笑ってね、いや、違う辰野君。この3つの力っていうのは生きる力や。そしてこの力を身につける方法は無限にあって、勉強もその1つだ。君は山登りで身につけたんちゃうか。ピンポンですよ。これなかったら死にますよ。集中力、持続力、判断力。僕はきつと山登りとか冒険を実践していく中で、身につけたんじゃないかと思うわけです。

日本を代表する法律事務所の創業メンバーの松尾栄蔵先生という弁護士さんとお昼食ながらこの話をしました。そして

ら松尾先生は、もっと大事な力？集中力、持続力、判断力よりもっと大事な力。

「決断力」である。いくら集中力持って、持続力持って、判断できても、決断しなければ何もならない。これはまさにリーダーに求められる力。

山登りでは登るのか、降りるのか。この決断を瞬時にやらないければ死ぬこともあります。この力も僕は山登りとか冒険を追随して、まあ手にしてきたんじゃないかな。

今までの会社経営の中で、どんな決断しましたかって聞かれました。会社作って30年以上経った時の話です、決断というのは数限りなく毎日のようにやっていますよね、

ここで言う決断というのは、過去の経験のない事案で将来を見据えてあえて困難な方を選ぶ。これが決断だという風に気づきました。7つの決断。7回あったわけです。どうですか皆さん、お聞きになりたいですか？はい、本買ってください。大阪の商売人ですからね。山ど渓谷社から出てます。僕はもう78ですからね、まあ、消えていくわけです。この後モンベルを引き継いで、頑張ってくれる後輩たちに、創業者がどんな思いでモンベルという会社をここまで引っ張ってきたかを書き残した遺書のようなものなんです。

高校1年生の時にこの1冊の本に出会って、自分の将来が見えたわけですね。山に関連したビジネスを始める。当時70年安保の真っ只中で、もう大学のキャンパスはゲバ棒持ってヘルメットかぶった生徒たちと機動隊がこう、チャンチャンバラバラしてる報道ばかり流れてる中で、こんなところで4年間もつたいないと思ったんです。アイガー北壁も登らないといけないし。

僕は親父には信州大学の試験受けると嘘を言って松本までは行ったんですけどちょっと方向変えて穂高登って、真っ黒な顔して家帰って親父に「悪い、試験落ちた」。落ちるも落ちないも受けてないわけですから。受けてたって通るはずない。

高校卒業してすぐ名古屋の大須通りに当時あったスポーツ用品店に住み込みで働き出しました。これが僕の社会人としての第一歩です。僕は京都大学には憧れたんですよ。西堀栄三郎、今西錦司。綺羅星のごとき探検家、冒険家がいる、京都大学には興味があったんですけど、逆立ちしたって入れっこない。僕は今、なんと京都大学の特任教授。すごいでしょ。北海道大学の客員教授。天理大学の客員教授。琵琶湖成蹊スポーツ大学の客員教授もやりました。学生として入学するのは難しいけど、先生にはすぐなれる。皆さん、それを目指した方がいいですよ。この中にも東大の卒業の方も京大もいらっやと思うんです。でもアイガー北壁に登ったのは僕しかいないからね。一品もんで勝負すべきなんです。もう心から皆さんにお勧めします。

繊維商社に勤めて、ひよんなことで、すごい繊維、ケブラーとかノーマックスとか、今まで見たこともないような、いわゆる高機能素材を扱うようになった。これ使ったらもっと登山用具、軽量でなおかつコンパクトで快適なものができるんじゃないか、ということでモンベルという会社を創業することにしました。

今ではモンベルは全国126、直営店の店があり、年商なんと

来期は2000億円という、とんでもない規模の会社になりました。従業員も3500人。まあ、2人で始めた会社が、まさかここまで来るとは、という風に思いませんでした。

うちの特徴は、大都市の出店だけではなくて、例えばこれは鳥取大山。これ大山の北壁。アイガー登る時にずっとお世話になった北壁です。ここに店を出さんかという事で出させてもらいました。人が誰もいない本当に誰もいない。これはオホーツクの小清水町というところですけど、(映像開始)流水が流れてきます。(映像終了)ここに店を出してくれって言われたら出しますか？ここですよ。早速店づくり。当日4500人の小さな町のモンベルの直営店に1日目、開店の日に3500人集まってきました。農家のばあちゃん方にモンベルの服を着てもらってファッションショーやった。もうみんな大盛り上がり。

これは富良野町南富良野、人口2400人。さらにハードルが上がりますけど。ここに北海道で一番大きなモンベルの店を出店しました。今年、奈良県の黒滝村、人口540人の村に出しました。森林組合の若者たちが運営してくれてます。人口4500人の町、540人の村、2400人の町。ある時気づいたのが7つのミッション。すなわち、これポーションナルサービスって書いてますけど、これはロータリークラブでよく使われること、「社会奉仕」。どんな仕事をしてても社会に役立ってることは間違いないんです。アウトドアという生業にしている我々にとって社会的な意味合いがあると気づきました。7つのミッション一番上から、自然環境保全意識の醸成。本当に自然が大事だなということを実体験することで身につけて行く。2つ目、野外活動を通じて生きる力。夢とか勇気とか知恵とか、僕がそうであったように子供の頃育んだそういったアウトドアの経験が生きる力を育てていく。集中力、持続力の話もしました。そしてもちろん健康寿命の増進。病院で長生きじゃなくて最後のその日、すなわちクオリティオブライフを全うするためにもアウトドアのアクティビティはすごく役に立つ。4番目、エコツーリズムを通じた地域経済の活性。これが恐らく今日のテーマ、皆さんのテーマに近いんじゃないかと思うんですけど。5番目、防災。災害時における対応力。6番目、農林水産、一次産業の支援。それからバリアフリー。この7つ。上から言いますと、まず、いわゆる国の単位で言うと、環境省ですよ、もちろん。2つ目、野外活動を通じて生きる力、文科省かもわかりません。健康寿命、厚労省。エコツーリズム、国交省と環境省。防災、これも国交省。国の単位で言うと全部縦割りになってるこのそれぞれの今我が国が抱えている今日的な課題、少子化、人口減少、いろんなことを解決するキーワードになる。それがアウトドアなんだっていうことを我々は進めていきたいと考えているわけです。

これを元に、包括連携協定を今もう170箇所を越えていますけど、府県の単位では京都府、山形県等。124箇所以上の市町村の単位。公的機関、法務省、網走刑務所、パラオ、国立青少年教育機構、京都大学等々とも包括連携協定を結ばしていただいています。民間としては日本航空、JR北海道、別にオプリーゲーションがお互いにあるわけじゃなくて、ここから何ができるかというのを1個1個を精査していくということです。

## パネルディスカッション 「水辺の安全をいかに進めるか」

進行	宮尾博一川に学ぶ体験活動協議会代表理事
パネラー	高畑栄治国土交通省中部地方整備局河川部長 田村祐司東京海洋大学准教授 菅原一成公益財団法人河川財団上席研究員

### 進行・宮尾博一

皆さんこんにちは、わずか30分の持ち時間しかございませんので、パネルディスカッションというタイトルにはなってますけれども、とてもディスカッションにはならず、各3名の方々にそれぞれお話をさせていただくということで終わってしまうのではないかなと思っています。RACという団体は、全国の会員で組織しています。川の体験活動を進めるとともに、子供たちが川で亡くならないように水難事故を防ぐということから、川の指導者を養成するというのもやってきております。この今回の全国大会でも水難事故を防ぐということについては大きなテーマにしておりますので、わずかな時間ではありますが時間をとらせていただきました。本日は3名の方に、ご登壇いただいております。水難事故の発生状況や事故防止策について、河川財団上席研究員の菅原一成さんにご説明をいただきます。それから、国土交通省が進めている「川に学ぶ社会」の構築とか、「かわまちづくり」において水辺の安全対策について、国土交通省中部地方整備局、河川部長、高畑栄治さんに、お話いただきます。学校の水泳の授業がちよっと変わってきて、命を守るというようなことがカリキュラムに入ってきたということから、「学習指導要領に基づく今後の学校水泳教育の方向性について」、東京海洋大学の田村祐治さんに、ご説明いただくというふうに思っております。それぞれのパネラーから持ち時間7分間程度で説明をしていただいて、それを順番に続いて話をさせていただくというふうに思っております。最後に時間がありましたら、それぞれの発表いただいた内容に関連しての若干のディスカッションができればと思っております。菅原さんの方から発表をお願いします。



### パネラー・菅原一成氏

時間も限られているので、端的にご説明をさせていただきます。私のほうでは水難事故の分析、調査などを行っております。これまでの事故の事例から傾向、そして対策についてお伝えできればと思っております。まず1つ目なんですけれども、ここにありますように、50年間から考えますと、水難事故の死者・行方不明者数というのは、一旦は大きく減少しました。しかしながらここ20数年ぐらいはずっと横ばいの傾向にあります。この数を水害と比較してみました。上が水難事故、下が水害になります。このように比較して見ますと、河川審議会により『『川に学ぶ』社会をめざして』の報告がなされた平成10年から、令和5年の水害被害者総数1,794人に対し、河川・湖沼池における死者・行方不明者数の総数は8,154人となり、約5倍の差があります。水害対策で「死者ゼロ」にむけ官民を挙げて被害軽減の取組がなされているように、我々としてはこれをゼロにしていきたいという風に考えているところです。こうした水難ですとか水害から命を守るためのフェーズ例というところで、まず未然に防止するというのが1つあると思います。それには、例えば水難事故で言うと、リスクのある場所に近づかないというのが確実な手段であると思うんですけども、ただやはり、キャンプ等のフィールド活動であるとか、水辺に行かないということはなかなか難しいところもあると思います。そうした場合にやはり知識、装備、情報というのが必要になってきますし、あるいは危機的状況になった場合に、どう対処するかということをしっかり技能として学んでいく。そうしたことが必要になるかと思えます。水害についても同じく、リスクのある場所に住まないだとか、水害からどこにどのようにして逃げるかということをしっかり分かっておく。ま、そうしたことが命を守るためのフェーズ例になるんじゃないかというところにあります。で、この水難のところですけども、これまで5000人ぐらいのですね、水難事故の死傷者、あるいは怪我した方の事故分析をしますと、約6割が川に入る活動でなんらかの事故に遭っている。ただ一方で、陸域でもですね、約3割、水難者が出ているというところで、必ずしも水の中だけではなく、陸域での活動においてもリスクがあるというところが分かってきています。

こうした事故が発生した場所の位置を日本全国の地図にプロットし、これを見ると水難事故はどこでも起こりうるというのがマップでも確認できます。さらに事故が集中しているところも、いくつかあります。そのうちの1つが、ここ岐阜県の長良川なんですけれども、千鳥橋というところがあります。ここでは、約20年間に8名の方が死亡しています。これらは同じようなパターンで発生しており、例えば飛び込みなどを行って、速い流れや深み等の要因によって溺れたというケースが見られます。これらの多くは、川がちょうど湾曲しているような場所で発生しており、ここ場所はかなり水の流れが複雑になっています。これを一度岐阜大学とですね、共同研究を行って、ここに相当な深みがあるということも分かりましたし、速い流れがあるということも当時調査しました。ただこれがやはりどのような流れで3次元的に動いているのかということが当時はうまく表現できなかったもので、現在最新のシミュレーションによる可視化も行っています。こうして見ると、ちょうど湾曲するところで速い流れが生

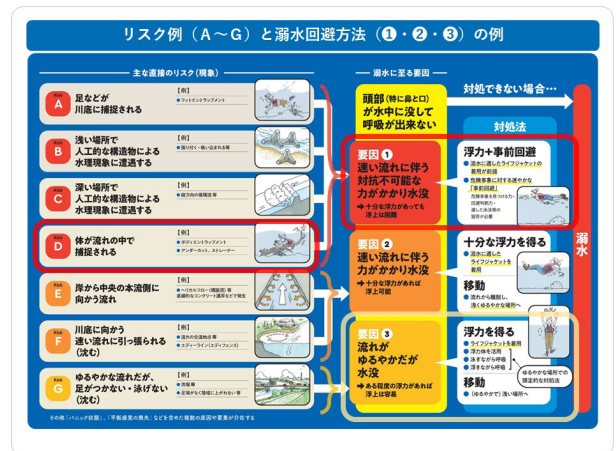
じていたりとか、この右下の映像にありますように、湧き上がる流れだとか、沈み込む流れというのが生じているというのが見てとれます。これが実際の映像です。増水している時に確認した時です。やはり増水時は、こうして沈み込むだとか、湧き上がるというような動きが顕著であるということが見て取れます。ただ、こうした事象はどこでも起こりうるものです。たまたまこういったところではそれが顕著であるということです。また河川特有の危険事象事例ということで、流れが生み出す力というのがございます。ま、そのうちの1つがエントラップメントと呼ばれるような速い流れの中で何かの形で水中に補足された時に、すごい力を受けるという事象で、これもシミュレーションによる可視化を試しています。この映像は、ライフジャケットをつけた状態ですけれども、速い流れのなかで水中にこういった丸太のようなものに捕捉された場合に、200キロぐらいの力で貼り付いて動けなくなると。なので、こういった事例ではライフジャケットを着けていても助からないという状況になります。これはシミュレーション映像でしたけれども実際の川で疑似体験を試してみた映像も紹介します。

川の、流れの強さが生み出す力というのは、これまでの学校教育では伝えきれていないというところがあると思います。では、子供の水難事故にはどんな実態があるのかについて、300件ぐらいの、子供が水難者となった事故を調査しました。このデータでは主に浅い場所で活動していても事故に遭ったというのが38%近くあることがわかります。他にも、深い場所だとかでの転落というのがあるんですけども、たとえ浅い場所で活動していても、水深の変化に気づかなかったり、速い流れに乗ってしまっ、流されてしまうなどの傾向が見てとれます。

こうしたことをこのようなパターン別に整理しました。例えば浅い場所で活動する場合、多くは膝下程度だと思んですけども、活動しているうちに深いところに入ったりとか、流れに乗ってしまったなどでだんだんこう深いところに行ったりという傾向があります。で、さらには流速が速いと、さらに危険な事象に遭遇するというのがいくつかありますので、それを後ほどご説明いたします。なので、浅い場所だから大丈夫と思っ、やはり川の中というのはいろんな速さ、深みがありますので、浅い場所でも最終的には深いところに行ったりだとか、より危険な事象に遭遇しやすくなったりというところがあります。それらを、リスク例としてAからGまで仮に設定をいたしました。これを見ていくと、例えばこのAからDの中には、速い流れ、先ほど見せたボディエントラップメントのような、流れの強い力に対抗できないような形で、水没してしまうというような事象があります。こうしたところはライフジャケットをつけていても助からない事象になるので、事前回避が必要です。Gのように緩やかだけれども足がつかないというところについては、ライフジャケット等で浮力を得るということで、溺水を防止することが可能です。そういったGのパターンの具体事例として、2017年に夜釣り中に、ほとんど視界がまもらないところで転落してしまった事故を挙げます。これは緩やかな流れなのですが足がつかないという状況のところ。この写真を見ると、陸域から一度水中に落ちると上がりにくいという状況がわかります。こうしたところでは、まず浮いて呼吸を確保したり、陸上へと上がる

必要があったりすると思いますが、なかなか夜の闇の中では、どこから陸に上がれるんだらうということ分からないことがあります。

次は流れの早い場所、同じこれ東京都ですけども、多摩川の上流側の流れが早い場所になります。こうした場所では浮いて待つことは困難であるため、やはりライフジャケットを着けておく。流れがある場合、水の中で、何が起きるか、何があるか分からないので、ライフジャケットを着けたうえで、正しい回避方法を取る必要があると思います。こうした水難事故防止に有効な対処法というのは、流れの様相に応じて違うということをしつかりと理解しておく必要があるかと思っ。よくペットボトルを溺れたら投げましょうという報道がなされるんですけどもスライドの左下のように、こういった緩やかなところで、高低差はあるけれどもなかなか陸に上がれないというようなところでは何か浮くものを投げてあげることは有効だと思っ。ただスライドの右のような、かなり距離があったり、流れが速かったりする場合は、まずそうした物も届かないというところもあります。流れている人に対して遠距離からピンポイントで届けることも、流れている人がそれをキャッチして浮くということも難しい状況だと思っ。やはり、いろんな水辺での状況にあわせた対処法が必要であり、こういう状況では何が有効かということをしつかりと理解しておくことが必要なんじゃないかと思っ。では具体的にどう防ぐかということについては、後ほどディスカッションの時に、お示しできればと思っ。



進行・宮尾博一

はい、ありがとうございます。続いて高畑さん、よろしくお願します。

パネラー・高畑英治氏

はい、ご紹介いただきました中部地方整備局で河川部長をしております高畑と申します。私のほうではこのスライドのとおりなんですけど、総じてお伝えをしたいことは、川の怖さを知って、川と親しむ。これが大事なんじゃないかなという事です。いくつか国の取り組み状況も含めてご紹介をしたいと思います。こちらがこの木曾川での最近の、川遊びとか水辺や川に親したしむ、そういったイベントごとの写真をいくつか載せてみました。左側の上の上、下がサップですとか、ラフティングですとか、昔だと、川にドボンと入るみたいなのがなかったのかもしま

せんけれども、最近は、こういったウォーターアクティビティをする方々も多くなってきてます。また右側の方に浅いところだと、ちっちゃい子供も含めて川遊びをしたり、右下の方だと学校教育も含めて水生生物調査とか使われてたり、本当に自由な空間として川を利活用いただいております。一方でですね、河川整備って言うことで言うと、洪水を流下させるために整備をするとか、あるいはその水を利用するために使うというような視点が強く思われているかもしれませんが、実際は河川法の中にも河川環境というものがありました。ここに書いてあるとおり川に学ぶ社会ということをお示しながら取り組んでいくのが大事だと考えこういった基本方針のもとに、これまで取り組みを進めてきております。今日の話の内容からしますと、例えば、2ポツにありますように、川に関わる正しく広範な知識、情報を知ること。3ポツにあるような、自ら危険を回避することを身につけることを学習の中でも取り込めればいいと考えております。その中で今年の事例として少しご紹介をしたいと思います。最近はなかなか学校の方でも川に近づいちゃだめだよっていう風なことを聞くことが多いんですが、これは今年の9月10日静岡にある狩野川の支川にある黄瀬川という川での状況です。左下の方の写真、少しご覧いただければと思いますが、3時40分の時が一番左側の写真ですね。その1分後がその下になって、ちょっと白波を立てて、水が流れてきているのがわかると思います。ちょうど黄瀬川の上流域で、あの非常に強い雨が降っておりまして、ここで言うと、若干その津波のように見えるぐらい、あの大量の水が押し寄せてきて右側は10分後にはですね、もう水位がかなり上昇してしまってます。右上の方にちょっと水位上昇のグラフを載せておりますけれど実際には10分間で約4m水位が上昇をしています。まさに気候変動が昨今言われてますけれども、こういったあの集中的な豪雨が上流域で降ると実際にはこういったことも起こりうるということを知っておくということが大事ではないかなと思います。増水時のあの怖さを知るだけではなくて、それと合わせて平時の川のことも知っていただくという事で、これはかわまちづくりの取り組みということ。狩野川の取り組みになりますけれども川の体験活動というものも実施をしております。今年の9月も狩野川の方で行われたもので、参加されたのは一般の応募いただきましたお子さんと、その保護者の方に一緒に参加をいただきました。ご覧のとおり左の下の方にヘルメットとライフジャケットをつけて、川に浮いている写真ありますけれども、やっぱり、実際、プールとかでやるのと違って川の中、水の流れがありますので、実際にこういったあの身をもって体験をしていただきました。プールと川の違いを知っていただく、またライフジャケットって言うのが有効なんだなということを知っていただく、こういった取り組みを進めております。

同じくですね、こちらもある、ライフジャケットの体験ということで、対象がお子さんとか親御さんではなくて、一番上の赤書きしてますけれども、警察、海上保安官、河川関係の行政機関、マスコミ、そういった方々を対象にライフジャケットを、実際に着用していただいて、川の中で浮いていただきました。水難事故に対して、川の中がどういう状況なのかということを知っていただく。ライフジャケットをつけると、あ、これはすごく有効です

ね、ということ身をもって知っていただくという事で、こういった取り組みを進めております。

合わせまして、水辺の楽校プロジェクトという事でご紹介ですが、先ほどのライフジャケットをつけて浮いたり、あるいは水生生物調査をしたりというところで、川の中でもそういった川に親しみやすい空間を一緒に作っていけないかという事で、地域と一体となって、こういった流れが緩やかなワンドですとか、そういったところ、自然体験ができる場を作るという事で水辺の楽校プロジェクトというものも進めております。左下に書いてますけれども、中部地方整備局管内においては、30箇所を整備しております。合わせて、かわまちづくりのちょっとご紹介という事で、ここ美濃加茂地区においても、かわまちづくり進められてます。今日の夜の交流会もですね、この場所で行われるということで、このリバーポートパーク美濃加茂というところが、国それから美濃加茂市と共同でですね、親しむ河川に親しめる空間として、整備を進めております。写真にもありますとおり、サップとかまさにウォーターアクティビティ進めているところもあります。あとあの川沿いをこうウォーキングしていただいたり、あるいはバーベキューをしたりという事で、川と親しむ空間そういったものを地域と一緒に作って行くという事で我々国土交通省と地域の皆さんと一緒に取り組んでおります。

こちらまた後で、あの出てくるとは思いますけれども、学校教育とかにおいても、やはり色々使っていただきたいという事で、我々のホームページにおいても、こういった様々なコンテンツの準備をしております。左側が河川水難事故、それから右側の方が河川環境ということで、最近ですと学校の授業でもスマートフォンとか、タブレットを使って、授業されるとところも多いと聞いてます。VRとか色々画像を使って、河川環境を勉強し、あるいは水難事故についても勉強していただく、そういったコンテンツも準備をしております。まさに、あの川の怖さも知っていただき、河川のその楽しさ、そういったところも同じく知っていただく、そういったことで河川に親しんでもらえればいいかなと思っております。

**狩野川 かわまちづくり**  
**川の体験活動を開催（川の駅ゲートウェイ函南）**

国土交通省  
中部地方整備局

開催概要  
 ○ 川の楽しさと怖さを自ら学ぶことを目的に、安全講習と体験会（一般参加者28名）を実施  
 ○ Eポート体験では参加者が息を合わせて漕いだり、川の中から景色を楽しんでいました  
 ○ ライフジャケットの効果を確認するため実際に流れに浮いて浮力を確認していました

日 時：令和7年9月27日（土）  
 午前の部 10:00～11:30 2グループ  
 午後の部 13:00～14:30 2グループ  
 場 所：川の駅ゲートウェイ函南  
 参加者：28名 ※参加者は一般公募により申し込みのあった親子



#### 進行・宮尾博一

はい、高畑さんありがとうございます。それでは田村先生お願いします。

パネラー・田村祐治氏

皆さんこんにちは。東京海洋大学で保険体育を担当しております、田村と申します。私はRACの他にも水辺の安全教育をやっております水難学会というところで20年間、背浮きの教育を中心に全国の消防の方々と一緒に小学校で普及活動をしております。今日は、水難事故ゼロを目指すために、学校の水泳教育はどうあるべきかという話をちょっと学習指導要領の改訂のことも含めながら、お話しさせていただきたいと思います。

水難事故の98%ぐらいは、溺水、溺れることによって溺死という事です。その予防策ということで、私たちこのライフジャケットがない場合、着てない場合を前提に、その時に泳ぐのではなく、泳いでエネルギーを消耗するのではなく、背浮きになって、鼻と口の呼吸器官を水面から出して、呼吸をして救助を待つというような、その背浮きの技能を習得することを子供たちに普及していました。ただし、やはり、実際に、川の流れのあるところだと、プールでやるのは割と簡単なんですけども、1回できてもそれが現実に役に立つからというとなかなか厳しい、または背浮き自体も学校でもやってるところがあまり多くありません。

その中でやはり水辺の活動、たくさん遊んでもらいたい。その中で命を守るためにはやはり1番目のライフジャケットを着用することが必要不可欠だと思って、今RACの皆さんと一緒にその普及活動をしております。それとですね服を着ていて、ライフジャケットを身に着けてなくて落水をする時もありますので、ある程度の泳力ちょっと泳げるっていう自分の確信があれば、落水時にパニックにならないわけですね。その意味で、今水泳の授業の中では平泳ぎクロールを中心にやっていますけども、ある程度の泳げるってことも大事じゃないかなと思っています。

10年に1度、小中高、幼稚園も学習指導要領が改訂します。現学習指導要領小学校ですが、これは5年前に2020年度に改訂されました。小学校の体育の授業の水泳運動という領域の中で高学年はこの大きく3つあるんです。従来は水泳の授業は泳ぐことを中心に、この1番目のクロールと平泳ぎ、これを中心にやってきました。5年前に初めて溺水予防、自分の命を守るための泳ぎということで「安全確保につながる運動」という項目が初めて出ました。その中で私たちが普及している背浮きとか、浮き沈みって動きがあり連続だるま浮きとか言いますが少し難しいんですが、背浮きは割とやれば簡単だという事で明示されました。ライフジャケットが未装着という前提での泳ぎなんです。5年前はちょうどコロナの真っ最中で、多く新指導要領が出ましたが、ほとんど水泳の授業自体がなかったということもあり、ようやく2年ぐらい前から水泳の授業が元に戻ってきましたが、まだ背浮きが普及していないというのが現実だと思います。今後どうしたらいいかということをお話していきたいと思っています。ライフジャケットが一番大事なんですけどもライフジャケットがなかった場合に背浮きをするということで背浮きのポイントをお示したいと思っています。まず1番目にあるように空気をいっぱい吸うってことです。そのあとは重心を頭の方に上げて、足をこう水面に上げるためにですね、顎を上げてお腹を突き出す、このくの字にならないでお腹を突き出して重心を頭の方に持って行く。裸足だどうしても重心が足の方

に行ってしまうので運動靴を履くと足が上がってきます。運動靴の浮力を使って履いてると足が上がってくる。背浮きができたら、回りにいる人が、先ほど菅原さんがお話しのように、身の回りの浮くものを投げて渡してやる。ペットボトルだけではなく身の回りのものは何か考えながら教えるっていうことが大事なと思います。ライフジャケットの着用のプログラムを作るということですね。今年の4月は夏のシーズンの前に、全国の教育委員会にライフジャケットの着用の習慣をつける通達もしております。今、背浮きっていう指導要領ですが、前段階として補助具としてライフジャケットを着けるようにしようというような形で進めていくべきかと思っています。

小学校「安全確保につながる運動(ライフジャケット着用泳法・背浮き)」  
授業概要

45分授業			
5分	20分	15分	5分
<ul style="list-style-type: none"> <li>あいさつ</li> <li>学習のめあて</li> <li>展示</li> <li>ライフジャケット習得・移動</li> <li>ペットボトル背浮き</li> <li>ライフジャケットの着用</li> <li>※2分間で着用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ライフジャケットプログラム</li> <li>着用チェック</li> <li>背浮き</li> <li>移動(リコガ、竹泳ぎ)</li> <li>いろいろな泳ぎからの背浮き</li> <li>潜る(潜りには慣れていないことを知る)</li> <li>集団で泳ぐ(他校来校生、万が一対応)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>背浮きプログラム</li> <li>水中歩行(すり足、カニ足)</li> <li>ペットボトル背浮き</li> <li>背浮き(ペットボトルを履きチャレンジ)</li> <li>3分間チャレンジ</li> <li>流れるプールでの歩行・背浮き</li> <li>川の流れをイメージし、ライフジャケット着用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まとめ</li> </ul>

進行・宮尾博一

はい田村さんありがとうございました。先ほど国土交通省の高畑さんの説明の中にもありましたけれども、今、かわまちづくりという施策を推進されていますし、それから辰野さんのお話の中にも川と、それからトレイルとか、歩いていってとか、パワーで色々なイベントをやるとかということで地域づくりがされているという事なんですけれども、いずれにしても、やっぱり川の安全という面からの視点が、ここ美濃加茂で最初にかわまちづくりが登録された時には、入っていませんでした。登録の条件の中に、川の指導者のことは全然触れられていなかったのですけれども、昨年から、かわまちづくりを登録する際には川の指導者講習を受けてる人を入れるという事が加わりました。それから先ほど、あの、プールのほうでもお話がありましたけれども、学校教育の中でも、命を守るという活動の中には、RACの指導者の活躍できる場があるという事もありますのでぜひ、街づくりをする方には川の指導者の、講習を受けていただきたいし、それから、RACの皆さんには、それからまだRACにも入っていない方々には、ぜひ川の指導者になっていただきたい、そういったまちづくり、地域づくりに参画していただきたいというふうに思います。

# 全国事例紹介

## 全国事例紹介1 北海道 帯広川

### 帯広NP028サポートセンター

### 千葉利光(ちばとしみつ)氏

皆様こんにちは。北海道帯広市から来ました、帯広NP028サポートセンターの千葉と申します。よろしくお願ひいたします。私どもは平成16年から北海道エールセンターという施設の管理運営を行っておりまして、河川教育の普及展開を行っております。この施設ちょっと変わってるのが委託料が全くもらえないという事で、様々なご支援をいただいて何とか立ち上げられたところですが、資金の確保も合わせて考えながらの活動を行っております。

10月まで現場が続いており、7年度の活動のまとめができてませんので、平成6年度の具体例を1から5まで、7年から始めた企業の社員研修、大人の自然体験から派生したその他ご紹介したいと思います。

1つ目のあの「川の自然環境調査」なんです、これは帯広開発建設部の発注で受注している事業です。比較的风险が少ないので、学校教育で普及展開するにはいいコンテンツになっています。生物調査と簡易的な水質検査を行う事業です。水辺の安全についても十分伝えるライフジャケットの重要性について子供たちに伝えています。これが生物採取の様子でございます。水深で言うと20cmから30cmのところでの活動で子供たちまず生物がこんなに川にいるのかということ非常に驚いたり、見た目より水が冷たかったり流れが強いなど様々な情報を吸収しているということです。採取した生物のうちの指標生物で水質を判定しているところです。これはパックテストというものを使ってpH、COD、NH4の3項目で水質検査を行っているところです。

川で体験すると当然ですが子供は川に興味を持ちます。子供だけで川に行かないように必ず事後の安全指導を行ってま。平成23年に札内川で中学生が5人子供だけで遊んで1名亡くなるという事故を受け、その保護者が「この事故を風化させず、二度と起きないようにしてほしい」というところから、継続的に続けています。具体的には子供だけで川に行かないこと、ライフジャケットを必ずつけること、浅く見えても気をつけること。この3つを必ず守るといことです。

子供たちはプールで普段水に入ります。水難事故の現場が1mの水深、プールで1mというそんなに警戒しない水深だと思うんです。川だと死亡事故が起きるような場合もあると、決して油断しないと伝えてます。この3つを守ってどんどん川に行ってくださいと伝えてます。参加者数は1054名です。これが中学生向けのEボート体験と川探検です。スタッフ乗るんですけど、ほとんど手を出さずに参加の学生たちだけで

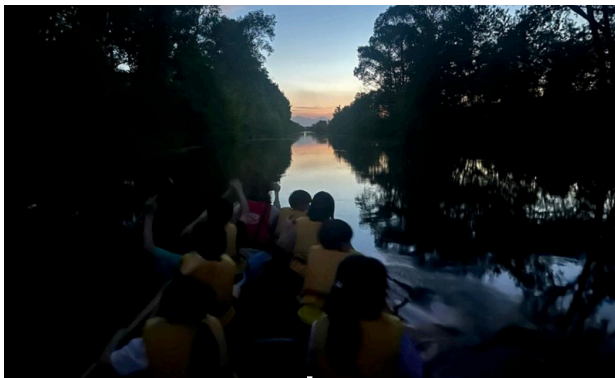
ミッションをクリアしていくということでチームビルディングを主体に置いている活動です。物理的に上手くいってるチーム上手くいってないチームです。そのあと川流れを行います。子供たちは非常に楽しくですね、流れを体験して「わあわあきやあきやあ」言ってますが、実は安全姿勢の訓練になっているという作りになっています。参加者数が61名受益者負担で1名2500円という料金です。これが「めっちゃ川シリーズ」四季折々で1年中通して川を体験していただく川を楽しんでる中で水難事故防止の技術であるとか不法投棄抑止の意識向上をしたいと考えています。参加費1万2000円のキャンプと参加費2500円のデイキャンプ、これを交互に合わせて通年で行ってます。毎回毎回、来てもらえるように企画を頭をひねりながら出してます。特に面白いのは冬ですね、北海道の冬なんで当然川はオフシーズンであまり行ってなかったんですが、実は冬の川はすごく楽しいということを3年ぐらい前からですね、冬の川での体験も行っています。子供たち、川流れした川がこんなに全面凍ったりするのでこんなに変化があるのかということ非常に驚いております。この事業は売上で言うと令和6年で290万あり多くの保護者とか子供に支持されていることが分かります。

あと資金調達のために観光分野に参入いたしました。8年前非常にうまい滑り出しだったんですけど、コロナで大打撃を受け今回復してるところです。これは帯広川を約2km夜川下りをする「ナイトリバークルージング」。冬の朝に川下りをする「ウィンターリバークルージング」ということで全国各地、世界から地元の方もあまり注目しない帯広川にどんどん人が来ている非常に面白い状況になっています。令和6年度の特徴として今まで8月が一番お客様が多かったんですが令和6年度は2月にインバウンドの方が大量に押し寄せました。私は英語できなかったんですけど仕方がないので一生懸命勉強して英語対応しました。私とスタッフでセーフティトークと世間話ぐらいはできるようになりなんとか仕上げて対応しています。今年の冬もものすごい数の予約が入ってるので非常日本の自然の良さを十分伝えていこうと風に考えております。

これ今年度から始めたんですけど、たまたま悩んでる社長の話を聞いてたら社員が「自然体験がいいんじゃないか」と大人の自然体験社員研修で自然体験を行なったものです。くじ引きでチームを決め火起こしと夜の川下りというのを行なって、チームビルディングで様々な問題を解消していく試みです。社員様のお話とか聞いて最初の試みということで非常に不安だったんですけど、蓋を開けてみると非常にいい感じで進んでおりました。これは火起こししてるところです。映像開始)火がついて、盛り上がっています、これが夜の川下りですね。スタッフが乗ってるんですけど、手を出さないで、この辺にぐるぐる回ったりしてますけど。はい。(映像終了)しばらくするとボートコントロールできるようになっております。お話

聞いたら配電工の方で、電気の大切さを再認識する体験が暗闇の川を進んで、ゴールをライトアップ見て電気って大事なんだというのを再認識してもらいたいという社長のご要望に答えてやっています。(映像開始) 歓声が上がってますね。(映像終了)

これあの、後のアンケートで社長様のお話で非常に評価、評判が良くてですね、来年度以降も毎年やりたいというお話をいただいております、これは内容的に効果もすごい売上高にもなかなかいいので、いろんな企業にお話をしています。企業様とお話してる中で派生して川と関係ないプロジェクトですけどできてしましまして改めて見ると、皆さんすごい高い技術を持った仕事で日本社会って成り立ってるんですね。世界で見てもこんなに便利で快適で清潔な国ってないんですね。仕事ってすごいんだと改めて思ったんです、子供たちはそれが分かっているのかなって考えた時に、十分は伝わってないということをおもって、学校教育でもインターネット上でも、イベントを通じましてもこの仕事を日本の仕事の強さすごいですね、子供に伝えるプロジェクトを今準備をしているところです。いろんな仕組みで、地域住民の方とつながって水難事故防止の知識であるとか、不法投棄を抑止する意識向上なんかを測っていく活動を続けてるところでございます。ご清聴ありがとうございました。



## 全国事例紹介2 鹿児島県 川内川

### かごんま川内川(せんだいがわ)RAC

#### 春園四郎(はるそのしろう)氏

皆様こんにちは。かごんま川内川RACの春園です。私が住んでいるのは鹿児島県伊佐市です。

この動画は、川内川の中流、伊佐市の湯之尾地区にある菱刈カヌー競技場で、今年7月に開催された市のドラゴンボート大会当日の映像をドラゴンボート競技PRのために編集したことになります。

この会場は、500mの直線コースも作れるため令和5年には鹿児島国体カヌー競技の会場にもなりました。

私の地元伊佐市は川内川の中流域に位置し、町の真ん中を東西に分けて流れる川内川によって古くから水田地帯が広がる地域でしたが、毎年洪水被害を受ける街であり、特にこの場所を少しさか上った川沿いの湯之尾温泉街は、温泉客で賑わう場所でしたが、毎年1回は床上浸水を伴う洪水にあう、そんな地域でした。

その対策のため昭和58年に完成したのが、会場下流にある湯之尾可動堰、この整備によってうまれた広い静水域、後のカヌー競技場となる場所が生まれたのでした。

もちろん、階段工もない船着き場もない、河川敷はただの野原だった場所でしたが、ここに目を付けた男がいました。

「ここは、舟どん浮かべて遊べば、サイコーの場所じゃ、オモシロカかもね」

平成2年、そんな思い付きで動き始めたカッパ姿のこの男、後の川内川の流域団体の代表ですが、当時は緑のドウランを顔面に塗り込み、「ひしかりガラッパ王国の大統領」に就任しておりました。

地元商工会青年部を率いて、また役所のモノズキを従え、当時の町長も丸め込んで、「ガラッパ大統領」として、ガラッパを前面に出して官民挙げて地域づくりを進めました。

ガラッパ夏祭、筏下りレースやドラゴンボート大会、はては佐賀市の松原川から嫁を大統領に嫁がせるなど、まさにパロディー王国主体で地域を盛り上げました。

でもちょっと真面目な活動もありまして、県内外から集めた子供たち50名を10日間、毎日川遊びや農作業体験をさせ、町内のキャンプ場や個人宅に泊める「ひしかりガラッパの学校」を平成4年から約20年継続していました。長期宿泊体験学習のハシリでした。

私もRAC指導者になってから何度かお手伝いに行きましたが、ザ・昭和な感じで、安全対策よりも「リスクある大自然の中の活動から、自ら学ぶ!」そんなポリシーを持った事業で行くたびハラハラドキドキでした。

この人たち「ガラッパ」の皆さんは、川内川を人が集まり楽しむ場所にしたいと参加型のイベントとしてドラゴンボートレースに注目、鹿児島県内ですでに大会を行っていた大隅半島の根占町から舟を借り、平成2年から大会を始めました。この競技は子どもから大人まで団体競技で気軽に参加できる競技で、子供の日に開催。

ただの河川護岸に足場を組んで乗り場を作り、多くの人が職城やグループ対抗戦を楽しみ、その後長ーく、私の町では恒例のイベントになっていきました。参加者の盛り上がりをもって河川管理者に整備をアピール「人が使わない場所を親水公園にするより、この場所を整備して!」、その声は大会を続ける中、5年後、大会をしていた対岸の温泉街側の河川敷が整備され、多目的に使える広場と、カヌーの乗入のできる場所が作られた。

感謝をこめて「ありがとう建設省」、平成8年、河川法改正の1年前でした。河川環境が良くなったことで、カヌー教室もできるようになり、少しですが川に関わる人間が増えていきました。

そのころ役所のカヌー競技振興担当者となった私、川で行うカヌー教室、川遊びは経験していましたが、川の危険やカヌーをするときの安全対策などの話になると、まったく分からない状態でした。

そんな中、河川事務所から誘われて受講したのがRAC。その時の受講で学んだ「リスクとハザード」、これが衝撃的とゆうか、なんというか、自分の中で考えていたボヤッとしていた危険だとか、冒険心を満足させるだとか責任だとか、今までぼやけていた物がハッキリと見えた気がしたのを覚えています。

いやー、「受けてよかったRAC式」でした。

時を同じくして、私はドラゴンボートレースに、地元集落で参加するわけです。

このドラゴンボート競技、日本各地の港町で行われているペーロンとか競り舟の国際规格的な競技で、クラブチームがあるなど競技性が高く、うちのローカルな大会にも、早いチームが参加していました。

負けることが嫌いな我が集落、負けん気を出してチームを作りお隣の水俣市まで出稽古に行ったり、大会に遠征したりと始めたわけです。

40オジサンから高校生が同じ目標で練習し、色んな大会に出ました。

この当時私は30歳くらいで、日本選手権大会に向け猛練習をしていたのですが、毎晩ピンクの小便が出ていました。それくらいキツイ練習を楽しんでいました。

熱中したドラゴンボートでしたが、多くは河川や池などで特設コース、コースブイも有ったり無かったりと、参加するたびに競技コースに不満を持つようになっていきました。

で、ついにそれならと河川敷を測量、直線250mのしっかりと

した競技コースを作り、競技の好きな人も、レクリエーションで参加する人も、みんなが不満を持たずに楽しめる日本一の大会を開きたいと、自ら実行委員長となり2002年から「いざドラゴノカップ」を開催しちゃいました。

もちろん冒頭にお話したガラッパの実施する大会もありましたが、新たに活動を始めた私たちに大会を譲る形となり、支援していただく形となりました。

そんなこんなで川で練習する人達がふえ、日常的な利用者が増えていきました。

そうすると起こるんですね、水難事故。過去に二人が、この会場で亡くなられました。

一人は、可動堰の隣にある公園に家族で遊びに来ていた幼児。目を離れたすきに、可動堰の上流、水深の深いところで命を落としました。

もう一人は、ドラゴンボート大会の1週間前、練習を見に来た姉弟、弟が溺れてそれを助けに入った当時小学4年生の女児が命を落としました。

基本的に川は治水のために整備されていて、親水護岸の場所以外は人が這い上がることは想定をしていない。だから大人でも這い上がるのは難しい。

こんなに人が集まり利用するようになったのに、なぜそんな改良ができない。

私は河川事務所に護岸改修や安全対策のお願いをしました。が、「水辺の安全啓発が足りないのでは」と逆に言われ、激しい怒りを感じました。

RACトレーナーになっていた私は、様々な活動を通じて流域の自分以外の変わり者の存在を認知していましたので、そのメンバーとも連携しながら水辺の指導者の講習やEボート指導者講習、RACイントラの講習会も実施しました。もちろん水辺の安全啓発を第一として。

ドラゴンボート大会で準備したコースは、カヌー大会でも評価され、県内の大会はもとより九州規模の大会も毎年開催されるようになっていきました。

そうすると、ついに河川事務所が動きました。

人の集まる右岸を階段工に、対岸の人の利用の少ないところは護岸に一定間隔で穴を明け、水面ぎりぎりに猫柳を定植、人が掴まえる場所が確保されました。

非常にうれしかったです。やっと思いが伝わった。

階段工になったメイン会場は、親水性があり安全で舟への乗り降りが簡単にできるようになり、さらに競技や練習はもとより、遊びにも使いやすくなりました。

そうやって、今になってみると大きな河川敷の整備が行われたわけですが、始まりは一人の男の夢思い付きから始まりました。

でも、夢を語る人がいて、その夢がどうだというよりも、楽しいから、面白いから、飲んで語って、考えたことをやって、夢中になる。

そんな人がイベント毎に増えていき、夢中になって関わって、いつの間にやら違う事を始めて、また新しい人たちが楽しみ、また加わっていく。

そんなことが川内川で繰り返されて、イベントを楽しむ人たちだけでなく、行政や河川管理者にも伝わり、そして県によって新しい艇庫も整備され、カヌーの国体競技開催にまで繋がっていきました。

流域が鹿児島・宮崎をまたぐ川内川では、流域の3市2町で活動する14の流域団体があります。

カヌーやドラゴンボートのイベントはもちろん、新幹線の高架橋、音の響きが最高ということで市民楽団による「水辺で乾杯お月見コンサート」、水面に映る照明をバックにカヌー場でライブイベント、河川敷にキャンプ場を作ってNPOになった団体、ダム湖を活かした季節のクルーズやインフラツーリズムに取り組む団体まで。

どんどん河川空間を活かして、好き勝手に楽しんでいます。障害のある方も含め。

そして皆さんの川にこんな集まり、飲み会ありますか？流域で活動する団体の集まりでの年2回の飲み会。

そしてもう一つ、川で活動する団体だけでなく、河川事務所、県の振興局、流域の行政はもちろん、漁協や地域活動団体やら、変わった個人まで、川仲間だけでなく流域内の人材を集めて語る流域会議、100ほど集まる会議で、自分の活動を語るだけでなく、同じテーブルで未来の流域を語り、そして飲む。

この飲みニケーションが新たな連携、新たな取り組みに繋がっています。川でつながった流域の人たちが、ともに川と流域の未来を作って、賑やかに、自分の川を夢見て活動しています。

そしてその中で、私たちRACは人が川から離れてしまわないように、遊び方や水辺の安全とか、人と川が直接触れる部分で活動を続けることが「川と地域との未来のために」できることだと思います。



## 全国事例紹介3 福井県 九頭竜川

一般社団法人環境文化研究所

代表理事

田中謙次(たなかけんじ)氏

### 地域社会に役立つEポートノウハウ術

#### 福井と岐阜を繋ぐ水系のご縁

皆さん、こんにちは。福井県から参りました、環境文化研究所と申します。

北海道、鹿児島とお話が続いて、また日本の真ん中あたりに戻ってまいりました。ここ岐阜県のお隣である福井県からですが、実は今日の会場を流れる木曾川・長良川と、福井の九頭竜川は分水嶺を同じくしています。いわば「同じ水を分けている」という縁のある福井県からやってまいりました。

本日はEポート30周年ということで、本当におめでとうございます。お祝いの気持ちと、これまでの事例ネタをしっかり持ってまいりました。

当研究所では、子供たちの体験活動はもちろんですが、大人向けの水辺アクティビティやツーリズム、人材育成、そして「川のあるまちづくり」をかなり積極的に手がけています。そうした活動の中から、今日は「地域社会に役立つEポートのノウハウ事例」をご紹介しますと思います。

#### RACとの出会いと「一艇100万円」の壁

実はRAC(地域交流センター)の全国大会の第4回は、福井県で行われました。平成16年のことです。その時に当研究所も加盟させていただいたのですが、実を言うと実行委員を仰せつかった当時は、RACというものが何なのかあまりよく分かっておりませんでした(笑)。

そんな中で運営に携わり、Eポートと出会い、「ぜひうちでも一艇入れたいな」と思ったのが2007年のことでした。

まずは2007年に一艇目を購入しました。大体100万円です。ご存じの方も多いと思いますが、Eポートって一艇100万円するんですよね。結構な金額です。その後、4年後の2011年に、今度は黄色のラフティングボートを購入しました。これも岐阜県のラフティング会社から購入したのですが、実はこれ、地元の「ミルコン」というコンクリート会社さんに購入していただいたんです。「所有は企業、管理は当研究所」という体制にしましたので、私たちの負担は0円。0円で我々が管理・運用をしています。

#### 企業連携で広がるボートの輪

さらに2017年には、黒いEポートを導入しました。これも先ほどと同様、地元の建設業者である「関組」さんに購入していただきました。ただ、この時は一つ条件をつけました。「地

域で水害が起きた時には、このボートと、うちのラダーマン(漕ぎ手)を無料で出します」という防災協定のような形で、うちが預かっています。管理と言いながら、日常的には体験活動に使わせていただいています。そして2024年には、4艇目を購入しました。今回は5社から各10万円の協賛金を募り、そこに当研究所の50万円を合わせて、計100万円で作りまし

た。こうして振り返ると、これまでに導入したボートの総額は350万円ほどになりますが、当研究所が実際に支出したのはそのうち150万円程度です。関組さんやミルコンさんからの管理費もいただいていませんので、非常に効率的に艇数を増やすことができている。現在、福井県内には国交省さんが所有する1艇を合わせて計5艇のEボートがありますが、今は1艇修理に出しているため、現場では4艇が元気に動いています。

#### 企業にとってのメリットと「名脇役」としてのEボート

こうした企業連携には、大きなメリットがあります。ボートが防災活動や環境教育、地域貢献に使われるだけでなく、企業にとっては「半永久的なPR」になるんです。私たちが活動していると、新聞社やテレビ局が取材に来てくれますが、その時にボートに描かれた企業ロゴがピンと映る。これは大きいですよ。これまではステッカーを貼っていたのですが、どうしても剥がれてしまうので、今回は剥がれないように塗料でしっかりロゴを制作しました。協賛金10万円というのも、企業にとっては協力しやすい手頃な価格設定だったようです。

私は、Eボートというのは「川のあるまちづくりにおける最大の名脇役(バイプレイヤー)」だと思っています。

「Eボートツアー」そのものを売るといよりも、様々な体験の中にEボートを登場させる。そうすることで、地域貢献をしたいと考えている企業さんと手を取り合うきっかけにもなります。Eボートは、まちづくりの可能性をぐっと高めてくれる存在です。これからも私たち自身が、川のムーブメントを面白く起こしていこうではありませんか。



## 全国事例紹介4 宮崎県 五ヶ瀬川

### NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク

代表

### 山田大志(やまだひろし)氏

五ヶ瀬川でのEボートを活用し様々な機会に川を身近に感じてもらい取り組み活動とEボートの魅力を紹介します。

12年連続で水質全国トップクラスの自然豊かな環境が認められた五ヶ瀬川です。

秋の市街地には300年の歴史をもつ日本最大規模の鮎やかな、土木遺産の瀬橋梁や土木遺産畳堤があります。

畳堤は岐阜県の長良川、兵庫県の揖保川、そしてここ宮崎県五ヶ瀬川にのみ現存する畳をはめ込み、堤防の高さを嵩上げできる構造です。

五ヶ瀬川の畳堤は大正末期から昭和初期に設置された最古のもので、980mが現存します。

そんな自然豊かで歴史ある五ヶ瀬川を活かしたEボート活用事例を紹介します。平成26年(2014年)全国大会エクスカージョンで五ヶ瀬川下りの準備のため、前年にEボート専任講師講習会を開催しました。

その後、延岡河川国道事務所よりEボート1艇購入いただきました。

平成30年からは毎年河川国道事務所職員向けの講習会を実施して、これまで50名以上の参加をえました。

年間を通したEボート活用の下準備への参加はヤンコクのメンバー(ヤングな国交省職員)により行われてEボートの取り扱い、操舵練習、安全管理、ダウンリバーと丸一日かけて行われています。

河川法第99条の委託をwin-winで継続しています。

初めての職員は舵取りに慣れるまでなかなか大変ですが、2年目の職員は何度も乗る機会があるので、かなり上手になっています。

静水で操舵練習後4キロ弱ダウンリバー。清流を楽しみながら実施しています。

宮崎河川国道事務所に2艇(3艇使える)あり、EVERYONE EASY ENJOY(誰でも簡単に楽しめる)で開催されています。小学校の環境学習や体力向上推進校の指定校向けのEボート、まちづくりイベントなどで中学生対象の流域治水ツアーの活動をしています。

移転した役場や台風の被害で廃線になった高千穂鉄道、水力発電見学や延岡メンマふるさと納税の返礼品の活用もしています。

放置林の説明を聞いた後Eボートで斜面崩壊を間近に見学、旭化成のダム湖(星山ダム)、平成17年台風の被害で廃線と

なった高千穂鉄道橋(第三ヶ瀬川橋梁)もコースに取り入れています。

振り返りを大切にしてソア一中でも濡れない前提で活動していますが、結局水かけが始まりびしょ濡れになることも間々あります。

10月19日は、かわまちづくりで新たに整備された河川敷の完成式典イベント、式典後はニワトリのエア遊具や堤防の草スキー、サッカー体験、キッチンカーなど350名の来場を得て、事務所の若手職員もフル稼働でした。

浅瀬で鮎やなみのミニ紙芝居や写真撮影タイムでは350名の来場があり、Eボートは109名が乗船。12回転と大忙しでしたが、乗場にはフロートを準備して足元を気にせず誰でも手軽の参加できるようしました。

来週末もEボートを活用したイベントを開始します。

誰でも簡単に楽しめるイベントの実施、宮崎なら11月頃までは楽しめます。この全国大会で皆さんと更に情報交換をしてEボートを活発に川をみんなが楽しみ、川のファンを増やす活動を今後も実施したいと考えています。



## 岐阜県事例紹介

### 岐阜県事例紹介1 岐阜県 美濃加茂市

#### 有限会社EAT&LIVE

#### 取締役

#### 水口晶(みずぐちあきら)氏

みなさんこんにちは。先ほどご紹介いただきましたリバーポートパーク、今日この後ですね、バーベキュー懇親会の会場になっていますリバーポートパークの施設管理運営者になっております水口と申します。木曾川沿いにあります公園の管理運営をしております。

今日の基調講演の辰野勇さんの話が非常に私個人としては感慨深くてですね、あの、私実は京都出身なんですが、ちょうど30年前ですね。辰野さんの写真に入っております野田知佑さんという方の川下りのスタイルに憧れまして、もうまさに30年前の今日ですね、11月1日に長良川岐阜県の長良川を京都から折りたまたみのカヌーを担いで川下りしたことないのに下り始めまして、で、もうあの死にそうになりまして。死にそうになってヒッチハイクしていたところで縁ができて、そのまま岐阜県郡上に、学校を卒業して移住しまして、もうこういった仕事に関わって30年というふうになっておりまして、非常に感慨深いなと思いました。

ちなみにその同じ年に、学生でしたのでリクルート活動でモンベルさんにも会社訪問行かせていただきました。その時はまだ今日あの本社ビルすごい目に入れてましたけど、あのポロポロのいたち堀というところで、ポロポロのビルで、で、我々リクルートスーツを着て何か案内してもらってました。あれが社長ですって言って紹介された時にですね、辰野社長はTシャツ短パンでカプランを着てたんですね。この会社ちょっとヤバいじゃねーかということで、それが今や年商2,000億ということでおっしゃってましたけど、川には物語があるなと思って改めて感慨深いものをしていました。

今日はですね、このリバーポートパークみのかも、2018年からスタートして、7年間活動させていただいているんですが、そこに至るまでの過程とか、あとどんなことをしているのかということをおの、説明の方を順にしていきたいと思ます。

で、この2018年に、かわまちづくり計画に基づいて、2018年にスタートしたんですが、計画そのものに私は関わらせていただいたのが大体2013年ぐらいだったかと記憶しております。で、この河川に公園を新たに作るんだということで、私はずっと20年近く長良川の方でラフティングですとか、カヌーとかキャンプ場の運営とか、そういったアウトドアの活動をしていましたので、お声がけをしていただきまして、まずはアドバイザーとして関わってほしいと。その時にあの、今日もう今

いらっやいませませんが、藤井市長、美濃加茂の藤井市長の方から、ただ公園を作るにあたって遊具を置いて遊ぶだけの公園にしたいんだとちゃんといろんな体験とかができて、ここが目的になって、なおかつ観光拠点にもなる。美濃加茂というのはなかなか観光資源が多くないので、観光資源観光拠点の一つになるような公園を作りたいんだということでお話をいただきました。まあ、あの、それではということで、我々のアウトドアの経験から、いろいろ当時の土木課の、今日も来ていらっやいませますが、職員さんの方と色々相談しまして、あるべき姿として、じゃあここはすぐロケーションもいいし、なおかつ名古屋という大都市圏から非常に近い場所にあるので、絶対たくさん人が来る場所になりますよということで、アウトドアっていうものを軸に街中アウトドア拠点を作りましょうという提案をさせていただきました。

その一つがその中身としては通常はレジャー&フィットネスということで、週末には名古屋とか都市部の方がレジャーに来られる。それから、日常的には地域の方がフィットネスの場として活用していただける、そういった公園づくりを進めたいということで、計画を徐々に進めていきました。

もう一つは、同時にこの美濃加茂市、大きく山のエリア、町のエリア、川のエリアと縦に分かれているんですが、それをちゃんと動線としてつながるような、この川のエリアができることで、新たに動線ができて、この3つをグルグルと対流しながら街がいろいろ形成されていくというような、そういったところに寄与するような拠点としても作っていきましょうというようなお話もさせていただきました。で、私、長良川の方にも拠点があるんですが、この木曽川ですね。昭和58年、ご存知の方もいらっやいませるかと思いますが、大きな水害があって、美濃加茂市内が水没するというようなことがありました。で、その結果、もう見ていただくとわかるとおり、ずーっと高い堤防が形成されまして、そのことでこれだけが原因ではもちろんないんですけども、やはりそのライフスタイル、日常生活と川っていうものがやっぱりちょっと切り離された部分っていうのが、この川の歴史の一つでもあるなと思って見てました。やっぱりそこをもう一度接点を作り直したい。こんなに素晴らしい川があるんだから、やはり今後に住んでいらっやいませる方との接点をもう一度作り直したいというような思いも持って臨んできております。

で、あともう一つはですね、日本ライン下りという非常に有名な観光遊覧船、まあ本当は続いているればもう去年で約百周年ぐらいだった。約百年続いた観光遊覧船の歴史が2012年に止まってしまった。これ、多い時は年間五十万人以上の方がこのライン下りに参加されていた。こういった経緯がありながら、今もこれもなくなってしまったことで、観光客としても少なくなってしまった。こういったところの流れを取り戻したいということで、この川のリバーポートパークを作るのに臨んでできたのが2018年の4月ですね。ちょっと行けるかな。

で、えっと簡単になんか説明していきますと、これ全景で、こういった形で今日この後見ていただいたバーベキューのエリアが15サイトということでありまして、こういったバーベキュー提供ですね。夜もやっていますし、これ冬場は冬も実はバーベキューをやっています、これ周り囲ってこたつバーベキューという形でやっているんですけども、あの夏ほどはさすがに来ないんですけど、それでも冬も利用していただいているような状況でございます。

あとはイルミネーションもこれからの時期やっぱりということですね。

平日の昼も夜も基本的には年間通じて都市公園ですので運営しているというような状況です。

で、あわせて先程からちょっといくつかご紹介も頂いておりましたが、木曽川を使ったラフティングツアー、SUPツアーそれからさっきレジャー&フィットネスと言っておりましたが、川でSUPヨガをやったり室内のホールでヨガをやったりということで、あとはランニングですとかサイクリングの方も非常にたくさんいらっやいませる室内のヨガについては、もうほぼ週のうち3、4日ぐらいはホールが使っているいろんなヨガの先生が使われている状況ですかね。で、イベントの方が今年、去年が大体年間190何日、週末中心にいろんなイベントが開催されているというような状況ですね。これは先月、先月です、10月に行われました。2年目になりますが、わんぱくりパーフェスという音楽フェスで、今回も3000人ほどは来ていただいたのかなっていうような、こういったことも開催をしております。で、初年度から初年度、大体5万人ぐらい予測をしていたんですが、初年度から9万人ぐらいは来ていただいてまして、今年は18万人ぐらい来場者、延べ人数ですけども、延べ18万人ぐらいの方に来場をいただいているというような状況です。



## 岐阜県事例紹介2 岐阜県 白山村

### トヨタ白川郷自然学校

#### 旭祐貴(あさひゆうき)氏

岐阜県白川村から参りましたトヨタ白川郷自然学校の旭と申します。よろしくお願いいたします。

今回紹介する川は、木曾川の隣を流れる長良川とひるがの高原で分水嶺を隔て、日本海側に流れこむ庄川流域です。庄川の支流を辿ると大白川という秘境があり、標高1200mに広がる白水湖と、庄川まで続く大白川溪谷を舞台にして、私たちは活動しています。最初に私について少しだけ紹介します。現在は白川村に在住し、トヨタ白川郷自然学校で勤務しておりますが、元々は岐阜県郡上市白鳥町の長良川のすぐ隣に住んでいました。子供の頃の夏休みには、午前中は学校のプールに通い、お昼ご飯を食べに家へ帰ってから、午後にはまた友達と一緒に、子供たちだけで川に出かけて遊ぶという生活をしていました。子供だけで川に出かけるのは危ないんじゃないかって言われるような、そんな生活をしていましたが、無事に生き残って、今のお仕事をしております。そんな経歴もあり、私はトヨタ白川郷自然学校の中でも、いろいろと水辺に関する活動を担当することが多く、今回事例発表を担当させていただくこととなりました。

トヨタ白川郷自然学校とは、有名な白川郷の集落から200m程標高を上げた山の中に、トヨタ自動車を作った自然学校です。ホテルのような客室に食事、温泉を楽しみながら、すぐ森に出かけられるのが売りの施設で、私たち自然体験専門のスタッフが常駐し、様々な自然体験を提供しております。なぜトヨタ自動車が自然学校を？というところですが、人と自然の共生をテーマとして、特に将来を担う子供たちを中心に、未来に向けた人づくりを目指しております。キャッチフレーズは「ワイルド&スマイル。天気がいい日は外へ出よう」ということで、実際外に出て、自分たちで体験をして感じるから学ぶことを意識して活動しております。今回は子供たちが主役となる子どもキャンプを紹介します。

まずは恐竜の谷探検キャンプについて紹介します。大白川に広がる白水湖の奥には、実は恐竜の時代の化石が眠っている谷があります。ボートを漕いで行くかヘリコプターで垂直に降りる以外は、誰も到達できない秘境です。1回だけ山男のような人がロープを担いで歩いてきたのを見たことはありますが、ちょっと例外だと思っています。そんな場所まで、岐阜県博物館の恐竜博士と共に、子供たちと化石を求めて探検に出かけます。この地域は積雪が大変多いので、雪解けで河原が毎年変化します。この茶色の石は4年前に谷が崩落して流れてきた時の岩です。谷の奥の化石を含む壁が毎年崩れて流されてくるので、河原には化石の入った石がいっぱい転がっています。そんな場所を歩



いていながら、化石を探して割って出てきたものを、博士と一緒にどれが化石なのか観察していきます。この石の丸いくぼみみたいなのは、貝の化石の入った跡ですね。多分この石を割ると中にはいっぱい入っています。ちょっと硬そうですけどね。途中、川原で休憩をとりながらも、1時間半ほど歩き続けると恐竜の足跡の化石が入った壁にたどり着けます。レプリカは岐阜県博物館で見ることができます。そんな場所まで1日かけて、ボートを漕いで歩いて子供たちと一緒に行くキャンプです。ちなみに、さらに上流のどこに化石のたくさん入った壁があるのかを、博士と一緒に2017年から何度も調査に行っています。未だにここだと確定はできないのですが、いくつか骨が出てきたりしています。夢のある地域を子供たちと一緒に冒険しています。これは帰りの様子ですが、いろいろと申請を通したうえで、博士が確認して勉強のために使う化石を持ち帰っているのですが、やっぱり自分で見つけて新しい発見があると、いっぱい持ち帰りたくなるのです。この袋に入るだけ、という目一杯入れていき、どんどん重くなります。どれだけ重くなくても、どれだけ歩くのが大変になっても、それでも最後まで歩き抜いて湖畔へ着いて、重くなったボートを最後、頑張って1時間ぐらい漕いで帰る。興味から湧く行動力を実感できる体験だと思っています。小学生向けのキャンプライナナップが昆虫、恐竜、川ということで、結構女の子がたくさん来るのが溪流アドベンチャーキャンプです。やっぱり同年代のメンバーがいっぱい集まると楽しそうですね。送り出してくれる親からは、自分では川になかなか連れて行けいけないので、こういうのにぜひ参加させてみたいですよという声が多かったです。

こちらは私が川のキャンプで子どもたちと作っている遊べる救助ソール、ペットボトルスローロープです。北川さんに以前ご紹介いただき、実際にキャンプで使用しています。子どもたちがそれぞれ作り、他の人を引っ張ったり、飛び込みポイントまでタクシーしたりと活躍しています。実物を持ってきたので投げしてみますね。川で遊ぶ子供たち一人ひとりが皆これを持っていたら、きっと、もっと安全に川遊びができるようになるかもしれません。最初に私は子供の頃、長良川で子供たちだけで遊んでいたと話していました。現代ではなかなか子供たちだけで遊ぶというのは難しいですが、私はいつもこのキャンプの最後に子供たちに向けて、「自分が大人になったら、自分の子供を川に連れて行ってあげられるような、そんな大人になるといいよね」と話しています。ぜひ、この子たち自身が楽しく川で遊ぶことを通して、自分たちが親になった時に、子供たちを連れて行ってあげられるような、そんなたくましい人に育つといいなと思っています。以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

### 岐阜県事例紹介3 岐阜県 笠松町

岐阜県羽島郡笠松町立松枝小学校

#### 小島一敬(こじまかずたか)氏

この度は、「川に学ぶ体験活動全国大会」にお招きいただき、ありがとうございます。

「自分ごととして、考え、学び、行動する子、木曾川下りを通して」と題し、本校の特色ある教育活動の一つである「木曾川下り」について、紹介させていただきます。

私が勤務する「松枝小学校」は、岐阜県の南部、岐阜市の南に位置する羽島郡笠松町にあります。拡大しますと、黄色の部分「岐南町」で、その下に東西に細長く位置しているのが「笠松町」です。ちょうど岐阜県と愛知県の境にあり、その境を木曾川が流れています。「笠松町」は、木曾川右岸に沿った町であり、木曾川と共に繁栄してきた町です。

「松枝小学校」は、その「笠松町」の南西部に位置します。学校規模は、児童数530名程度で、全学年3クラス編成の、笠松町の中では一番大きな学校です。まず最初に、本校が進める、これからの教育と子供たちに付けたい力について、お話しします。

近頃、「非認知力」という力が注目を浴びています。この力を子供たちにどう身に付けていくかは、これからの教育において、大きな任務の一つと考えています。

まず、上の「認知力」ですが、これはいわゆる点数で表すことができる力のことを言います。簡単に言えば、テストの点数、テストの点数で測れる力で、主に知識や技能のことが多いと思います。

それに対して「非認知力」というのは、数値では測りにくい力、協調性 コミュニケーション力、主体性、などです。

大人になってから、生きていくために必要な力は、非認知力の方であることに気づきます。

そして、この「非認知力」を身に付けるために特に有効といわれているものの一つに、自然体験学習があります。

学校で体験的な学習を行う意味は、非認知力を身に付けるためです。

最近の学校現場では、ICT化が進み、タブレットなどを使って、何でも簡単に調べたり、見たりすることができます。

学習を進めるにあたっては、とても便利になりましたが、モニター上で行う活動は、知識は高まっても、間接体験であったり、疑似体験でしかありません。本校では、ICTなどの最新の学習を取り入れることと並行して、不便で面倒でも直接体験する活動を積極的に取り入れています。

優れた質の高い体験的活動は、子どもたちの豊かな感性を醸成すると考えるからです。

「見る(視覚)」「聞く(聴覚)」「味わう(味覚)」「嗅ぐ(嗅覚)」「触れる(触覚)」五感を働かせ、物事を感覚的にとらえる体験は、子どもたちの感性を大きく高めます。

また、活動中に「なぜ、どうして」「どうしたらよいか」などの、突発的な問題や課題が発生することも多く、日頃学んだ「知」を総合化しながら、課題発見能力や問題解決能力を高めることにもつながります。

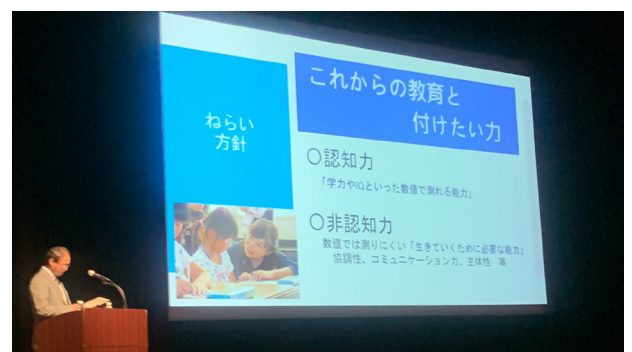
いくら漢字や文法を覚えても、豊かな感性や想像力がなければ、良い文章を書いたり、読み取ったりすることはできません。このように、豊かな体験的活動は、豊かに生きていくためのもとなる能力を高めることにつながると考えています。それでは、具体的な「木曾川下り」の実践をご紹介します。

学校管理下外ではありますが、5年前の夏、木曾川で本校の児童が命を落とす悲しい事故がありました。木曾川を危ない場所だからふたをすするという考えではなく、笠松町と豊かな恵みと発展をもたらしてきた郷土でもある木曾川の素晴らしさとその裏にある危険を知り、郷土愛と共に自ら危険を回避する力を育てることを目的とし、新たに一から考え、令和4年度より松枝小学校の新しい行事として行っています。当時は、コロナ禍真っ只中で、熱中症対策に、天気、川の水量に加え、コロナ対策まで、安全を確保するために、かなり険しい課題が多くありました。しかし、危険だからやらないのではなく、やることを前提に、いかにしたらやれるかを職員で考え、計画しました。また、学校の願いや方針を理解して下さった保護者、地域、行政のご協力があったこそ、実現された行事でもあります。

主旨を読み上げます。

我が町笠松町は、濃尾平野の北に位置し、全国でも有名な木曾川沿いにある。笠松は、木曾川の豊かな恵みに支えられ、発展してきました。笠松の歴史は、木曾川と共にあると言っても過言ではありません。つまり、木曾川を学習することは、笠松を学習することでもあるのです。

木曾川の壮大な自然を体感しながら、木曾川の素晴らしさや歴史を学習することは、郷土愛を醸成させると共に身近な課題にも目を向け、新たな未来を切り拓いて行こうとする児童を育むことにつながると考えます。



木曾川下り」のねらいを「歴史・自然・安全」の3つに設定し、川下り本番に至るまでに、この3つに関する事前学習を計画的に行いました。

それぞれの学習活動を、歴史から簡単に紹介します。「歴史」についての事前学習は、「笠松を語り継ぐ会」の会長さんにお越しいただき、木曾川とともに発展してきた笠松町の歴史について教えていただきました。

木曾川は、今も昔から美濃と尾張の境であり、交通の要所であることから、江戸時代は笠松に陣屋があったこと、一時的にですが県庁が置かれていたことなど、木曾川とともに発展してきた笠松について学びました。次に、木曾川の「自然」について、学習しました。

木曾川には、全国でも珍しい河跡湖(かせきこ)があります。河跡湖(かせきこ)とは、河川の一部が、もとの河から切り離されてできた沼のことを言います。

木曾川には、小さなビオトープがあり、トンボ池と言われ、42種類のトンボの生息地になっていることなど、素晴らしい自然がたくさん残っていることを学びました。

これは、60年ほど前の木曾川の写真で、川遊びをしている子供たちの風景です。

この時代、川遊びをしていた地域のおじいさんやおばあさんは、川の中の危ないと言われていた場所をみんなご存じです。

時代の流れとともに、川が整備され、川遊びが禁止されている現代では、子どもたちに、川から身を守る知識や方途は身につけていません。

「安全」の学習では、羽島郡広域連合消防本部の皆さんに来ていただき、系統的に心肺蘇生法講習会、水難救助教室やライフジャケット体験、全学年での着水泳を実施するなど、身近な木曾川との生活を「自分ごと」としてとらえて、自分の命を自分で守るすべを学びました。

続いて、当日の活動内容についてです。開催日は、毎年、8月の最終土曜日です。

夏休みが終わって最初の週休日に行うことにしています。

参加者は、6年生児童と、ボート一艘に2人ずつ乗船する大人になります。初めて乗船する学校職員や保護者・地域ボランティアは、事前研修に参加していただいています。

実際に乗船してもらい、ボートの操作の仕方や注意点などを学んでもらっています。

また、事前の現地調査を行います。

準備するものは、こちらにまとめさせていただきました。

<準備するもの>

ボート(13艘)：笠松町(8) 他の自治体(5)

ライフジャケット、パドル：笠松町、他の自治体観光バス3台(行きのみ)

<協力依頼等>

関係機関：漁業組合木曾川管理事務所 笠松町各務原市

消防署笠松町消防団(救援ボート) PTA(ボート搬送用トラック)

川下りのルートです。

川島会館前を出発して、笠松みなと公園がゴールです。この区間は、車で道路を走ると5キロメートルくらいあります。

途中、中州で川遊びを体験します。

川島会館前の河原からEボートに乗船し、川下りのスタートです。途中で川遊び体験するのは、この辺りになります。

途中、中州での川遊びをします。ここでの活動の子ども们的感想を紹介します。

川の中に入ると、魚のにおいがしたり、藻が浮いていたり、トンボが飛ぶ音がしたりして、自然は目で見るだけでなく、においや感触、音からも感じられると思いました。

私は、木曾川の川下りをしているときに、たくさん大きな鳥を見たり、ボートをこいでいる時に目の前で大きな魚が川でとんでいたりしてビックリしました。遊ぶ時間も小さい魚を見たり川で泳いだりしてとても楽しかったです。中州で遊んだ後は川下りの後半戦。ゴールの笠松みなと公園まで力を合わせてボートを漕ぎ進めます。

川下りを体験した子どもたちの感想を紹介します。

川下り教えてください、ありがとうございます。やる前は、とても怖かったけど、やってみたら、意外と楽しかったです！特に、ボートを運ぶとき、ボートがめちゃくちゃ重くて大変でした。他にも、パドルで漕ぐとき意外と水が重かったです。波に入るとき、めちゃくちゃ速くて、涼しくて、気持ちよかったです！もう一回やりたいと思いました！！手伝ってくれた方々、地域の方々、今回は、とても貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました！

真夏であっても、ひんやりと冷たい川の水や心地よい川の風や匂いは、木曾川下りをやってみて初めて体感できる感覚です。

木曾川下りで立ち寄る場所は、無人島のようなものですから、人間が来てビックリする小魚の群れや何処からか流れてきた古い空き缶などに遭遇すると、いつも生活している場所とは違い、人のいない空気を肌で感じることができます。

このような五感で味わう体験は、子供たちの感性や想像力を強く刺激します。松枝小の子どもたちには、川下りで、目に焼き付け、肌で感じた木曾川の自然を豊かな情緒と郷土愛につなげてほしいと思います。

本日は、ご清聴ありがとうございました。

## 岐阜県事例紹介4 岐阜県 大垣市

### 緑の風

#### 浅野純一(あさのじゅんいち)氏

大垣市から来ました浅野と申します。よろしくお願ひいたします。今日、話すのは、大垣市で川のプレーパークというテーマで遊んでいます。その内容を紹介したいと思います。

大垣市は、濃尾平野の地理院地図の色別標高図の、青いあたりのところですね。だから海拔5mぐらいに大垣市があります。縄文の海進のころは、波打ち際だったので、ずっと青いのはみんな海ですね。これは国土地理院地図の色別等高線でもどこでも拾えますので、使ってみてください。このあたりは木曾三川の沖積平野で、川の上に町が浮かんでいると、いってもいいくらいです。

本題に戻りますが当団体は、大垣を代表する大垣公園で2011年から都市公園の利活用を目的にした『大垣公園プレーパーク事業』を継続して受託しています。市民からの評判もよく、他の公園でも活動してほしいという依頼があり、その一環として先ほど申し上げた『川のプレーパーク』を開催しています。

その場所は大垣市の、杭瀬川(くいせがわ)塩田橋(しおだばし)右岸にある杭瀬川公園周辺で7月20日から、月曜日から金曜日までを続けて2週間連続してやっています。午前と午後の2部制で10時から12時、13時から15時で各回定員15名でやっています。尚、指導者は2名でがんばっています。

プログラムの流れは以下の通りです。

ライフジャケットの正しい着方の指導、流水でのライフジャケットの浮き方、指導者の合図確認とOKサインの徹底、遊ぶ場所の範囲確認とコンクリート護岸回避のしやがみ込み、その後、2組に分かれて1組はガサガサ体験をしながら上流に行き、ライフジャケットだけのプカプカ体験と、もう1組はSUP体験で途中で交代、最後に全員で川の中のゴミ拾い。

2017年にセブンイレブン基金を利用してライフジャケットやタモ網などの機材を購入してから始めたこの事業ですが、最初は川に入ることが気持ち悪いと言っていた子も川遊びの楽しさや、ライフジャケットの安心感で楽しそうに遊びます。また、ガサガサで捕れるモズクガニ、小鮒、テナガエビ、時にはウナギも入り大興奮です。こんな身近な川にたくさんの生き物がいることを知って夏の日を満喫しています。機材としては当初からSUPを10艇以上使っています。

最後になりますが今回、皆さんに知っていただきかけたのがこのタモ網です。かれこれ10年近く使っていますが、ぜんぜん丈夫です。三谷釣漁具店の黒、これが最高です。皆さんもぜひお使いください。特にウナギの場合はすぐにもう一つ同じタ

モ網で二重にして逃げるのを防ぐとゲットできます。  
以上で事例紹介を終わります。ありがとうございました。



## 次期開催地へのフラッグバトンリレー

### 次期開催地へのフラッグバトンリレー

来年、第25回は東京・浦安となり、田村実行委員長へRACフラッグが手渡されました。



## 閉会挨拶

大会副実行委員長  
RAC代表理事宮尾博一

## 地元演芸披露

### チアダンスチームCheerTink

CheerTinkは岐阜県内で活動する園児から高校生のチアダンスチームです。

全国大会出場経験あり。笑顔と元気あふれる華やかなパフォーマンスで会場を盛り上げていただきました。

総勢54名

- ①チーム名 ミント 曲名 Love& Like 2:29
- ②チーム名 リルミー 曲名 You Suck At Love 2:37
- ③チーム名 デイスタ 曲名 Bring the Beat 悲しみなんて笑い飛ばせ



## 交流会(野外地場)

### リバーポートパーク BBQ会場

(美濃加茂市御門町2丁目6-6)

今回は、事例発表でも紹介されたリバーポートパークという屋外のBBQ会場での交流会でした。60名近くの参加者を得て川の仲間の交流会ができました。島本河川環境課長も迎える藤井市長も交流会に参加していただき、中部地方整備局の森本局長ほかみなさんも大勢で参加していただきました。木曽川上流河川事務所からも斉藤所長ほか大勢の方が参加いただきました。岐阜県の河川課や大会参加の全国のRAC会員の方もほとんどが残って参加していただき、大会事務局や協賛の各社など抽選会も盛り上がりしました。やっぱり川の仲間は野外での交流会それもリバーサイドで行えてよかったです。大いに交流が進み、川の活動がますます風通しよく活発になる姿がよく見えました。来年は浦安でお会いしましょうと約束しました。



## DAY 2

2日目は、木曾川流域を舞台に、実際のフィールドを活かした体験型プログラムが展開されました。前日の講義中心の内容とは異なり、参加者が自ら体を動かしながら学ぶことで、より実感を伴った理解が得られる一日となりました。まず、ダム建設工事の見学では、普段なかなか立ち入ることのできない現場を訪れ、治水や利水の役割、地域との関わりについて具体的に学ぶ機会となりました。実際の施設や工事の様子を目の当たりにすることで、川が私たちの暮らしを支えていることを改めて実感する場面となりました。そのほか、ラフティングやカヤック、SUPといった水上活動の体験も行われ、川の流れや自然の特性を肌で感じながら、安全に楽しむためのポイントを学びました。体験を通じて、川の魅力だけでなく、その中にあるリスクや注意点についても理解を深めることができ、参加者にとって実践的な学びとなりました。さらに、河川環境施設の見学では、自然環境の保全と活用を両立させる取り組みが紹介され、地域資源としての川の可能性について考える機会が提供されました。また、Eボート体験など、誰もが参加しやすいプログラムも実施され、年齢や経験を問わず楽しみながら学べる内容となりました。これらの多様な分科会を通じて、参加者はそれぞれの関心に応じた学びを深めるとともに、他の参加者との交流も自然に広がりました。現場での体験を共有することで、より実感を伴った理解が生まれ、川に関わる活動の意義や広がりをも改めて認識する機会となりました。2日目は、川の持つ魅力や可能性を体感するとともに、安全や環境への理解を一層深める場となり、学びと体験が融合した大会の締めくくりとして、印象深い一日となりました。

## 分科会1

### 新丸山ダム工事見学

集合：JR美濃太田駅前

参加者 12人

主催者の用意した車と一部参加者の車で新丸山ダム工事事務所へ向かう。

途中、車内で木曾川周辺の河川の流れの歴史による地形の変化や人々の生活の変化など地元参加の方が自主的に解説していただいた。

工事事務所でこれからの見学の予定や現在のダム工事の説明を受ける。

新丸山ダムは木曾川中流部にある丸山ダムの直下に、現ダムを稼働させたまま、より高いダムを建設するという、とても難しい、ユニークな工事とのことであった。

そのかさ上げの高さは約20m、既存の丸山ダムから47.5m下流に本体を重ねるようにして建設されている。総貯水容量が約7,953万 $\text{m}^3$ から約1億3,135万 $\text{m}^3$ へと約1.7倍、うち洪水調節容量は3.6倍に拡大する。過去に何度も大規模な水害を起こした木曾川の治水の要として設計された。

宮尾博一RAC代表(元所長)の参加もあり、再開発特有の用地買収の苦労話も興味深いものがあった。

現ダム堰堤と工事現場を見られるビューポイントから見る現場は迫力があつた。



最新の機材で建設予想映像をスコープで見ることができた。次に工事現場を上から見る事ができる、現ダムの管理事務所へ向かった。その屋上に登り、工事現場全体を見た。



現在、展望台からは古いダムと新しいダムの建設現場を同時に見ることができ、まさに「歴史が塗り替えられる瞬間」を目の当たりにできる貴重な体験でした。

#### ■参加者の声

- ・ダム工事現場を見渡せる展望台からの迫力がすごかった。
- ・取付道路も大工事のプロジェクトが感動的
- ・ダム工事現場見学の帰りの立ち寄り案内に感謝。この季節の八百津名物の「栗きんとん」買えました。
- ・新丸山ダムのユニークな工事現場を解説付きで見られて感動的だった。



#### ■まとめ

美濃加茂市はかつて大きな水害を受けて中心街のほとんどが水に浸かった。洪水を制御できる貯水量のより大きなダムになり安心度が増す。

参加者のみなさんは迫力ある工事現場に感嘆の声が出ていた。

なかなか見ることのできない貴重な機会になった。工事現場の皆様の案内に感謝します。

## 分科会2

### 木曽川ラフティング

場所:リバーポートパーク

コース:

リバーポートパーク → 桃太郎公園 (犬山市栗栖古屋敷) 約9.2km

参加者:10名(ラフティング9名SUP1名)

サポートカヤック:3名

#### ■ 活動概要 目的・狙い

この分科会では、実際のラフティング体験を通して「水辺での安全行動」と「木曽川の自然」を体感的に学ぶことを目的とした。

乗る前にインストラクターから安全講習、装備確認、漕ぎ方の練習を経て川に出るまでの流れを丁寧に行い、参加者全員が安心して挑戦できる体制を整えた。



#### ■ 当日の様子

当日はスタート時は薄曇りで気温が12℃と肌寒かったが、徐々に日も出てきて、木曽川の水量もちょうど良く絶好のコンディションとなった。

ラフティング参加9名のうち、経験者3名、未経験者6名(20代~60代)。SUP持ち込みでの参加1名は、普段は琵琶湖で漕いでいて川下りは初めてということだったので、瀬ではカヤックがサポートした。

スタート地点ではインストラクターからセーフティトークが行われた。

パドル操作の基本や、ボートから落ちた時の対処方法を教えてもらい、参加者は真剣に耳を傾けていた。

グループごとに2艇のボートに乗り込み、インストラクターの

明るい声掛けで、全員1、2、1、2と声を合わせてしっかり漕ぎ、未経験者も緊張感なく笑顔でスタートした。



このコースでは大きなウエーブのある瀬が4つ程あるが、どの瀬でも波に乗りボートが大きく揺れても皆楽しそうに下っていた。

途中SUPの方が複雑な川の流りに翻弄されボートから落ちたが、落ち着いてセルフレスキューすることができていた。瀬場では、20代の若い参加者が川に飛び込み、同じボートに乗っていた参加者も一緒に楽しんでいた。初対面の人もすぐ打ち解けて楽しめるのがラフティングの魅力の1つである。途中4mぐらいの岩場の飛び込みポイントがあり、希望者だけチャレンジした。飛び込む際は真下に落下するのではなく、前へ飛びましょう等と具体的な注意の後に、他の参加者の掛け声で次々と元気よく飛び込んだ。

1度川に潜ってから浮かび上がった時は皆満面の笑顔で、川と水を全身で体感できたようだ。



暖かいお茶やおやつで休憩してから再スタート。この後また瀬が続く、最後の瀬はこの日1番のビックウエーブだったが、参加者は声をあげながら木曽川の雄大な流れを楽しんだようだった。

ゴールでは参加者も一緒にボートをトラックまで運び、バスでスタート地点まで移動した。

全体的に危険な箇所はなかったので、自然の美しさや流れ

の強さを肌で感じ、終始ダウンリバーを楽しんでいたようだ。安全対策(装備など)、インストラクターの技術などがあっての楽しさだったので、座学では得にくい「生きた安全知識」を共有したと思う。

#### ■ 参加者の感想

- 川から見れる景色がいいですね。
- 日本ラインの名前は知っていたが、実際来てみて、層になった岩の様子がキレイだし、迫力があって楽しかった。
- 「もう終わり?」と残念そうにしている方がいた。
- SUP参加者「波が高いので膝ついて行きます!」と富士の瀬を気合いを入れて漕いでいた。
- RACの大会のオプションは何種類があったけど、自分は川が好きなので、ラフティングにしました。
- 最後の瀬が怖かったけど、ジェットコースターみたいで楽しかった。  
普段は河川の仕事をしているが、川下りをしたことがなかったので、いい経験になった。
- 機会があればカヤックもやってみたい。
- 前日辰野さんの講演を聞いて、次の日にこのような自然体験ができてよかった。

#### ■ まとめ

今回のラフティングを通じて、多くの参加者が川の楽しさと、そのための安全に対する準備や装備の大切さを体験する時間となった。  
川を危険なところとしないためにも、この体験を次の安全教育や水辺活動に活かし、参加者自身が地域での安全啓発の担い手となることを期待する

## 分科会3

### 河川環境楽園

河川環境楽園 見学(自然共生研究センター、木曾川水園、ア  
クア・トトぎふ)

11月2日9:30~

ガイド: 自然共生研究センター 山下政恭氏  
自然発見館 神藤淳氏

同行: 小野正雄

参加者: 5名

河川環境楽園は、「国営公園」、「岐阜県営公園」、「水辺共生体験館」、「岐阜県水産研究所」、「自然共生研究センター」、「東海北陸自動車道の川島PA・ハイウェイオアシス」からなる複合公園で、川島PAから直接入園もできます。

本会では、上記のうち「自然共生研究センター」、「木曾川水園(自然発見館)」、「アクア・トトぎふ」を見学しました。

#### 【自然共生研究センター】

河川・湖沼の自然環境の保全・復元のための基礎的・応用的研究を実施し、その結果を広く普及するため、様々な分野の研究者と連携を図りながら研究を進めている。この施設の最大の特徴は、世界最大級の延長約800mの3本の実験河川を有していることです。

当日はセンターの山下主任研究員により、実験河川の概要や研究成果、課題等を説明いただきました。

近年のトピックスとしては、揚水装置の設置(地下水の利用)で水温調整ができるようになり生息する生物が増えた、遊水地の機能や高水敷の樹林化を研究するエリアを設定し、昨今の河川管理の課題に取り組まれているとのことで、みな熱心に見学されていました。

また当センターでは、校外学習支援や各種研修などにも取り組まれています。その1例として、オリジナルの「魚の紹介カード」を見せて(提供)いただきました。

校外学習等の際に採取できた魚のカードを配っているようですが、単に名前と写真・特徴だけでなく、レア度に応じて点数が書かれており、子供たちが夢中になるとのこと、当然皆さんも喜んで受け取られていました。



### 【木曽川水園】

国営公園「木曽川水園」は、木曽川の上流から下流まで229kmの自然風景を約500mに凝縮した人工河川エリアであり、木曽川の上流域で見られる名勝：寢覚の床や高樽の滝、また中流域の農家や棚田、下流域の猿尾などの水制や助命壇が再現されています。

ここでは、木曽川水園をフィールドとして環境教育プログラムを実施している「自然発見館」の神藤指導員により、木曽川水園の概要、またフィールドの特徴の1つで、ここで見られる木曽五木の観察・見分け方を説明いただきました。

木曽五木（ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコ、コウヤマキ）は江戸時代には伐採が禁止され、伐採した者への罰は、「木1本首1つ枝1本腕1つ」と呼ばれるほどで、中でも木曽ヒノキは、現在も伊勢神宮に奉納されています。

そのような話を聞きながら木曽川水園に歩を進め、木曽五木に辿り着くと採取して観察します。ヒノキとサワラはよく似ており葉裏の模様（Y型、X型）で区別する、コウヤマキは他の葉とは全然異なるなど、ひと通り5つの枝葉を観察してみました。

これまで体験したことがないプログラムだったようで、みなさんには楽しんでいただけたかと思います。



### 【アクア・トトぎふ】

世界淡水魚園水族館「アクア・トトぎふ」は、淡水魚に特化した水族館では世界最大級の施設となっており、特徴としては、4階から3階（上から回ります）は長良川の源流から河口まで、2階は世界の大河（メコン川、コンゴ川、タンガニーカ湖）、1階はアマゾン川の魚類をメインに展示がされています。また秋篠宮家の方々が、度々訪れている水族館でもあります。

今回はあいにくの繁忙期ということでガイド等をつけていただくことができず自由見学という形になりましたが、バックヤードツアーやお泊り水族館など特別感のあるイベントも実施されています。

当日もかなり混雑しており、お目当ての水槽を見るために、しばし待たなければならないような場面も多々ありながら、短い時間でしたが楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

河川環境楽園、この度は短い時間で回り切れませんでしたので、機会があれば1日ばかりでお越しいただければと思います。



## 分科会4

### 木曾川Eボート

4名の参加がありました。河川環境楽園の西駐車場の集合。事前説明(Eボートの特性、セーフティークなど)の後、河川環境楽園の支川の出口でEボートを下ろし、最初に操船の基本を学びました。



白井さん(ODSS)がインフレーターボートで先導し、梅本さんのガイド(舵取り)で本流を下りました。この日の木曾川は水位は高くなく風も穏やかでゆっくり下ることができました。子どもたちの川下りだと思い通りにコース取りができないところですが、プロのリバーガイドのもと、参加者はほとんど漕ぐこともなくすんなりとゴールの笠松のみなと公園にたどり着きました。

Eボートの“E”は本来交流(Exchange)の意味ですが、Environment、Ecoなど「環境」の意味を含ませることもできます。参加者の皆さんにはゆったりとした川下りの中で、木曾川の歴史や文化に思いをはせていただけたら幸いです。また、前日報告された水口さん(EAT&LIVE)の体験活動や川の学習活動、小島さん(松枝小学校)の地域学習、環境学習の取り組みの場を身をもって体験されたことは、参加者の皆さんの気づきと学びにつながったと思います。



#### 参加者の感想:

「自分たちのフィールドの小さな川と違った大きな木曾川を下ることは貴重な体験であった」、「同じ木曾三川でも前回大会の長良川とはず

いぶん違った川下りで、それぞれの川の個性が分かった」、「自分たちが普段使っているのは都市を流れる川なので、このままでは使えないが、参考にしたい」など。川下りの後、笠松町の歴史資料館を見学する予定でしたが、送迎時間の関係で実施できませんでした。

報告者 高屋良平(エヌエスネット)



## 魚の生態に学ぶ生きた川づくり

多くのフィールドと水理実験から得られたデータが  
豊かな河川を取り戻します

### リップラップ

自然石を模った多様な生物  
に配慮した護床エタ型の  
魚道ブロック



### ステップール

全越流・アイスハーバー  
混合型魚道ブロック



### 瑞流(すいりゅう)

護床ブロックにアイスハー  
バー型魚道機能を付加し  
た構造



(公財)リバーフロント研究所と共同開発



### 遊泳(ゆうえい)

開水路とアイスハーバー型  
や全越流型の隔壁を組み合  
わせた構造



祝 全国大会開催 NPO 法人 川に学ぶ体験活動協議会 会員  
**共和コンクリート工業株式会社**

本 社 〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 3 丁目 2 8 (札幌エルプラザ)  
TEL 011-736-0181  
東京本社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-10-10 (いちご南大塚ビル)  
TEL 03-6907-3721  
長野営業所 〒380-0921 長野県長野市大学栗田 2135 (大成コートワンビル 2F)  
TEL 026-217-4747

## さあ！川を楽しもう！



**建設環境研究所**  
KenKan Consultants Co., Ltd.



本社 〒170-0013 東京都豊島区東池袋2-23-2  
東北・中部・大阪・九州  
札幌・東京・さいたま・新潟・岡山・広島・高松・高知・沖縄・環境科学技術センター

第 24 回  
川に学ぶ体験活動全国大会 in 美濃加茂  
開催おめでとうございます。

日本最大級の品揃えと展示数  
**カヌー専門店**

株式会社クリアウォーター  
**TEL 043-497-3951**  
千葉県千葉市中央区川崎町 1-34

**CLEAR  
WATER  
KAYAKS**  
www.clearwaterkayaks.com

## 特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会について

川に人が集まる社会をめざし、川から学び恩恵を受けながら、次世代につなぐための、日本で唯一の「川の指導者」育成機関 川に学ぶ体験活動協議会 (River Activities Council 略称: RAC) は、川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代に合わせて総合的に展開していくために、川をフィールドにして活動している各地のNPO法人・市民団体が参加し、2000年9月に設立され、2005年12月にNPO法人として登録した協議会です。

RAC (NPO法人川に学ぶ体験活動協議会) では長年に渡り、川で安全に且つ楽しく活動できるよう 行政とも連携しながら川の指導者を育成してきました。それら全国約4000名の指導者が、それぞれの地域の川で活動を行っています。RACでは川での安全管理ができる指導者の育成、各地域での水辺の安全講習などを展開して参ります。川は正しく安全に管理をすればとても素晴らしい学びのフィールドです。1人でも多くの人たちが川で楽しんで活動をしていただければと思っています。

### 川に学ぶ体験活動協議会 活動理念

- 1、川に学ぶ体験活動は、感動する心を大切に、川と遊び学ぶ楽しさを伝えます。
- 2、川に学ぶ体験活動は、川への理解を深め、川を大切にする気持ちを育てます。
- 3、川に学ぶ体験活動は、ゆたかな人間性、心のかよった人と人のつながりを創ります。
- 4、川に学ぶ体験活動は、人と川が共存する文化・社会を創造します。
- 5、川に学ぶ体験活動は、川の力、活動にともなう危険性を理解し、安全への意識を高めます。



NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会事務局  
〒114-0014 東京都北区田端 1-11-1 勘五郎ビル104  
TEL 03-5832-9841 Email rac@rac.gr.jp

川に学ぶ体験活動全国大会事務局  
NPO法人エヌエスネット  
岐阜県岐阜市西野町7丁目北町5  
事務局長 高屋良平 TEL 090-8335-0086 info@odss.co.jp